

(縦帳)(表紙)

明和七年庚

三番

問屋御用留之写

寅十一月ヨリ安永九子年迄テ

問屋古代々御達書并御用留之写

三番

内意御座候、然者同日枝川千蔵院様使僧、村役人耆人添へ被
 参申候、先刻御紙面被仰聞候人足不調法之儀、早速相糺候処、
 五人程難言仕候違も無御座候由、急度相阿候得者、寺江欠入
 拙者迄寺々御申訳ニ御座候、尤村中早速召寄、以来ケ様等之
 儀、相慎候様ニ屹ト申付候、依之此度之儀、其筋江被仰出候
 段御差扣、御内々御見済ニ預り申度由、千蔵院江伊助願ニ御
 座候ニ付、使僧を以御訴訟申候由、使僧被参候、先拙者承置
 候由挨拶申遣候、又々廿七日・廿八日都合三度使僧参候間、
 内済致遣シ申候事

覚

〇(米) 一馬 三拾疋

一駕籠 式挺

一歩行夫 三拾人

右者、讃岐守祖母遺骨在所江指下候節、人馬無滞被相出可被下
 候、尤泊り昼左之通、来ル廿六日江戸出立、道中八日積り、水
 戸通

十一月廿六日 小金泊り 藤代昼

同 廿七日 中村泊り 府中昼

同 廿八日 長岡泊り 石神昼

同 廿九日 介川泊り 荒川昼

同 晦日 植田泊り

十二月朔日 四ツ倉泊り 木戸昼

同 二日 熊川泊り

右千住々奥州相馬・長塚迄、尤宿割之者来ル廿四日江戸表出立
 致候節、可申談候、以上

相馬讃岐守内

十一月廿二日 本山勘兵衛 印

千住々宿々 問屋衆中

右先触、廿六日夜四ツ時着、早速枝川江送り申候

一右宿割衆氏家勇太殿廿七日朝被通候所、人馬先触之通り御座
 候、併合印江戸表々失念致候間、御通前ニ以飛脚相引可申候

由、御申談ニ御座候、以上

右御先触写シ、廿七日朝御役所へ持参致候、前振ヲ見合候処、宝曆十二年午二月七日、讃岐守様御袋様御遺骨御通り御座候所御通り之節者、両問屋麻上下ニ而罷出候、尤金百疋宛被下候、同心衆兩人被相詰候、右之次第も申上候

一廿八日夜、長岡御泊り、四ツ時々相詰申候、尤人馬指引同心衆式人は又四ツ過合詰申候、人馬四ツ時々寄申候所、先荷七ツ半時々参候、御遺骨廿九日朝六ツ過ニ御通り、首尾能相済申候、尤問屋兩人江式朱文宛被下候

一人足 五拾六人 下御町

内三拾五人 札人足

五人 分かき

三人 御先見

但し、式人廿八日暮合々長岡へ遣ス

老人者廿九日朝荷物迄遣申候

六人 荷付手伝

残り七人

一馬 五拾疋

内式拾三疋

訳三拾五疋 下御町
十五疋 上御町

四疋 分かき

式疋 相馬登り荷物

式疋 府中御家中

五疋 御評定御用

式疋 泉御家中

残り拾三疋

一魚蠟燭

式拾挺

但シ廿夕掛ケ

是ハ問屋前ばんぼり式ツ燈申候

右者去ル廿九日、相馬讃岐守様御祖母様御遺骨御通ニ付、人馬遣高書上候、以上

寅十一月

加藤三郎兵衛

江幡治郎衛門

御町御役所様

○^三朱

一向御山常福寺様十二月三日御登 城、伝通院江御移転被為 仰付候ニ付、御荷物小川廻シ、同九日ニ御送り被遊候、歩伝馬上下御町々半々ニ出シ申候、五町目月番委細五町目ニ扣申候、後住様結城弘経寺様被為 仰付、依而御寺受取衆中御下り九日ニ御通り、是又歩伝馬指出申候、是も五町めニ扣申候

一後住様御荷物絹川廻シ小川揚ニ而参り候由、左之通り生井沢合送り状、小鶴合参り申候、去ル十七日ニ小川江着舟、十八日ニ小川附出シ申候

送り状之事

一荷物 百七拾三固り

内 長持三棹

簞笥式棹

味僧樽其外品々

右之通、小川へ申参り候

十二月十七日

生井沢村

庄屋
久右衛門

右之通、送り状十八日五ツ時、小鶴へ送り参候、早速枝川江送り、御役所江写シ懸御目、人馬左之通願申候

覚

一歩行夫

七拾人

一伝馬

五拾疋

右之通願申候、以上

覚

十一月十八日分
一歩行夫

七拾人

上御町

内 壹人 結城へ向御山江之御状、小川へ送

参候間、枝川江遣申候

拾人 荷付手伝

拾人 荷物四固、枝川迄

ノ式拾壹人

残り四拾九人

同日
一伝馬

五拾疋

内 廿疋

上御町

兩穀町

内 六疋

荷物廿八固り枝川迄

残り馬 四拾四疋

一歩行夫 六拾人

内 四拾五人 上御町
拾五人 下御町

内 拾人 荷付手伝

壹人 上御町へ人足迎ニ遣シ申候

四拾壹人 荷物拾三固り、枝川迄送り申候

ノ五拾式人

残り人 八人

同日
一伝馬

四拾四疋

内 廿疋

上御町

兩穀町

内三拾疋 荷物百廿八固り、枝川迄送り申候

残り馬 拾四疋

兩日遣高

歩行夫 七拾三人

ノ伝馬 三拾六疋

廿九掛
一魚蠟燭 拾挺

是ハ十八日夜問屋前江ぼんぼり壹ツ燈シ申候

右者向御山御荷物十八日・十九日兩日ニ枝川江相送り申候、歩

伝馬遣イ高書上申候、以上

寅十二月

加藤三郎兵衛

御町御役所様

江幡次郎衛門

一右御荷物十八日暮合々五ツ時迄件之通参、翌朝迄不参候故、
相残り人馬相返シ、別段ニ左之通被仰付候而、十九日暮合迄

ニ無相違相送り申候、尤御荷物百七拾三箇之受取取置申候

覚

廿名
一魚蠟燭

拾挺

代鏢貳百文

右者、問屋前江御用ニ差出シ申候、代鏢受取申候

十二月

駿河屋仁右衛門

右代鏢書付御裏判相済、年寄中々受取申候、以上

四〇

一明和八年卯正月十八日、例之通讃州様・播州様・大学守

様々年頭御礼御使者御出被成、例年之通取計申候、尤播州様

御使者者、上町六千波通ニ而御帰、依千波江人馬先触申遣候、

大学守様御使者茂坂戸江先触申遣候

讃州様御宿

高野惣治郎

播州様御父子様御宿

吉田屋弥一兵衛

大学守様御宿

六町め名主
伝五衛門

御賄仕出シ所

本七町め
市郎兵衛

覚

一歩行夫 三拾五人 但十六人 上御町
十九人 下御町

わけ 御朱印長持

四人

御参内傘

一人

御日傘

一人

長持袴棹

四人

合羽籠三荷

六人

拾六人

但シかんばん着仕候

駕籠貳挺

八人

竹馬貳荷

貳人

両掛挾箱貳荷

貳人

薬箱持

一人

長持袴棹

四人

着替風呂敷包持

貳人

是ハ木村軍治殿江

拾九人

都合三拾五人

一伝馬

貳拾四疋

但十貳疋 上御町
下御町

内 拾九疋、枝川迄相勤申候

残り馬 五疋

右者、去ル廿一日向御山常福寺様御入院ニ付、枝川迄相勤申候、

歩・伝馬書上申候、以上

卯正月

御町御役所様

加藤三郎兵衛
江幡次郎衛門

右常福寺様於清嚴寺御馳走被遊候ニ付、歩・伝馬七ツ時々相詰
候様ニ被仰付候処、上下歩・伝馬夜明ヶ候而相揃、尤常福寺様

御出早ク間ニ合兼申候、重而者寄伝馬被仰付候刻限ニ屹ト差出シ可申事

五

○(朱) 一明和八年卯六月廿日夕、本三町目宿屋三郎左衛門方江、牧野越中守様御郡奉行木村茂左衛門殿被致一宿、例年之通り我々江金百足宛被下候由、三郎左衛門悴持参、受取申候、尤五町目江も右世悴直ニ持参相渡申候、右茂左衛門殿江我等忝人罷越申候而礼申候、御役所江ハ翌廿五日我等罷出訴申候
一去寅閏六月十日牧野越中守様御郡奉行津久井軍衛門殿、五町目小兵衛所ニ一宿、例之通我々江金百足宛給候由、五町目番江小兵衛持参仕候处、我等茂江戸表江登、留主ニ在之間、同役請取置、帰り次第可渡由、金貳百足之請取遣、同役我等分預り置申候处、当六月廿四日迄我等去年中ハ不給義と存居候所、右此度被参候茂左衛門殿へ、我等廿四日夕礼ニ罷越、去年中ハ御通りも無御座候哉と尋候处、同役軍衛門罷通り、各江も目録進候義と相見候由挨拶ニ御座候、依而拙者義、去六月中ハ江戸江罷登、閏六月廿日過ニ罷下り候、留主中御通り被遊候義と相見候段、まさらかし挨拶仕候、依之当廿五日ニ馬さし長左衛門を以同役方江申遣候者、去年中も越中守様へ給り物も在之由、其元様御預り被成候由、被遣給候様申遣候处、去年中ハ通り無御座候、前々も通り無御座候年も在之由挨拶ニ而、金子遣不申候、扨此度給物訴ニ御役所江罷出候

所、御役所御留帳、去年中之御留御覽被成候处、左之通閏六月十日津久井軍衛門殿一宿金百足ツ、給候由、同役訴之御留御座候、又々右之次第同役方江申遣候得者、小兵衛方もせんぎ致シ可申由、挨拶ニて御座候、是ハ全ク同役遣込、只今迄無沙汰ニ致居候事ニ御座候、扨々不届至極仁ニ御座候、然者年寄中へも内々申聞候事茂在之、又者町頭長四郎方江内々相咄候義在之候、左候得者、同役挨拶之致方も無之義と相見江、太郎衛門方江右之次第申出、何分可然御了簡給之様ニと頼ニ御座候由、又候作十郎ニも太郎衛門方へ罷越、内々頼候趣、廿七日ニ彦市方江太郎衛門罷越、我等ヲ呼、兩人ニ而申聞候者、此度三郎兵衛懸り合之義、表立候得ハ、三郎兵衛難義および、其上障り等も相見候間、我々兩人入割之間、内々ニ而見済給候様ニと達而入割故、致承知候、左候ハ、目録三郎兵衛直ニも持参不罷成義と相見候間、吉のや小兵衛へ頼遣候様ニと三郎兵衛へ達可申由、先者右之通り相済申候、小兵衛同日持参致候間受取申候、扨右金子請取、去閏六月十日給候金子御預り之所、此度被遣候受取申候、為念如此御座候、以上、遣シ申候

六

覚

○(朱)

一人足百八拾四人

但七拾五人
百九人

上御町
下御町

内式人 御先見
八人 荷付手伝

百廿五人 札人足
四拾九人 分かき

百八拾四人 拾五正 上御町
一馬百五拾正 但三拾五正 下御町
百正 郷村

内六拾四正 札馬

五拾壹正 分かき
貳正 備前守様御家中

六正 姫馬

四正 岩城御家中
壹正 駿州久能守

貳正 錢座

百三拾正

残り馬貳拾正 貳正 上御町
拾八正 郷村

右者去ル四月廿四日、相馬讃岐守様御通ニ付、枝川迄相勤申候、
人馬并所々遣申候人馬高書上申候、以上

卯七月 加藤三郎兵衛

御町御役所様 江幡次郎衛門

一我々江金百正宛被下置候、五町め月番ニ候処致失念候て、此
度五町目々書上申候、重而為見合扣置申候、扱先触ハ例之通
百人百正ニ有之、人足百五拾人、馬百五拾正願申候所、例年

今人足殊之外多御入用、急ニ下町々不足分指出シ申候、重而
者右之見合可然事

七

覚

〇朱 一人足七拾人 但三拾五人 上御町
三拾五人 下御町

内式人 御先見

三拾八人 札人足

六人 荷付手伝

百四拾六人

残り人貳拾四人 貳拾三人 上御町
十三人 下御町

一馬 四拾正 貳拾正 下御町
拾正 上御町

内式拾三正 札馬

三正 分かき

三正 岩城御家中

壹正 向御山所化衆

貳正 相馬御家中

三正 御評定御用

壹正 御仲間方御用

百三拾六正

残り馬 四正 但、下御町馬計

右者、本多彈正小弼様、去ル九日御通りニ付、枝川迄相勤メ候人馬、其外所々遣高書上申候、以上

卯七月

御雇
高野惣治郎

江幡治郎衛門

御町御役所様

右之通り九日九ツ半時首尾克相済申候、五町め月番ニ候所、病氣故、七日六月番相請取申候、仍而御雇高野惣治郎被仰付罷出申候、尤兩人江金百疋被下候、先触人足三拾八人、馬式拾三疋

八(朱)〇

一明和八卯八月十日、吉川文治様御尋ニハ、先達而御目附宮田三郎衛門殿交代登ニ付、先触御同役江相頼、問屋前江頼遣候所、右使之者請取ヲ遣候様ニ申談候所、受取ハ何れも御屋敷様へも差上不申候由ニ而、不遣候付、又候弥請取ハ不差出候哉と相尋候得者、右御先触之儀者、長岡ノ千住迄之御先触ニ御座候得ハ、直ニ御屋敷様ノ長岡江御遣被遊候儀を此方江御頼被遊候故、前々ノ受取ハ一向差上不申候間、此度迎も差上不被申候由相答申候段、御町奉行中山庄司左衛門殿江、御目附雨宮又衛門殿御尋ニハ、問屋ノ右之挨拶ニ在之處、前々請取差出シ候様ニ相覚申候得共、弥受取ハ差出シ不申候哉、御目附方一同承知致度由、中山庄司左衛門殿挨拶ニハ、先触ハ長岡江御屋敷ノ可被遣答ヲ御頼故、受取ハ差出不申候義と相見ヘ申候、併問屋方一ト通り相糺、御挨拶可致旨、中山庄司左衛門殿相答被申候、右之次第如何之義ニ在之哉と御

尋、右御先触之義者、成程先月廿日ニ三郎左衛門様御屋敷ノ御遣被遊候由、受取之儀兩度迄御尋御座候處、先年ノ何方様江も差上不申と御答仕、差上不申候、然ル所同廿日ニ文治様ノ御達ニ者、御目附方御同役衆ノ被相頼候間、受取遣呉候様、使之者申談候ハ、受取可遣候、其外御家中ノ参候先触も被頼候、先触ニ在之候間、受取呉候、頼候ハ、是又可遣候、併頼候事ニ候間、五・七日延引致候而茂不苦候間、御町之者長岡江参候序ニ遣シ、尤長岡問屋ノ茂受取、其方共江取置可申候、都而先触之受取遣候義ニハ無御座候、頼候分計可遣候、右之通御達在之間、以来者協合ノ被頼候先触ニ候間、受取給候様ニと入割在之御方江ハ受取遣可申候、尤書振左之通認遣可申候、此段五町目江も申合候

覚

一御先触

彦通

上 右御先触御頼ニ付受取申候、長岡村江便次第届ケ可申候、以

月 日

問屋

誰様御屋敷

右之通認可遣候、但歩行夫役・馬指江も為吞込差置申候、以上

明和八年卯八月廿日

九(朱)〇

請取申初之事

一 初拾俵ハ 但四斗式升入
一 初拾俵ハ 但四斗式升入

本四町め問屋
江幡治郎衛門
加藤三郎兵衛

右者問屋役相勤候ニ付、為御合力被下置候間、為請取申候、依
如件

明和九年

辰二月

中山庄司左衛門
佐野四郎右衛門

石川久助殿

江橋忠兵衛殿

右手形廿四日ニ差上、廿九日ニ御裏判相濟、其夜馬場儀七殿江
相頼、晦日ニ初渡候筈之處、雨天三月朔日ニ受取申候、尤部垂
村中手弥六交りニ而、兩人分拾九俵と六升渡り申候、貫目拾四
貫目宛御座候、来年々ハ正月十九日之御評定ニ差出、正月中之
内初被下候様ニ可仕候、且初付候馬頭江酒手少々遣、能初附呉
候様ニ頼可申候事

一〇

○^朱 一 卯暮馬金上納大晦日迄ニ漸金三拾貳兩取立相納、百六拾

兩口皆納ニ付、手形御役金方々相戻り候間、御判御消シ被下
候様ニと御役所江差上申候、初四拾兩口正月十三日ニ金七兩
相納メ、殘金三拾三兩之儀者、我等江戸表江十四日ニ登ニ付、
同役廿四日迄ニ取立上納可仕、御役金方江申合セ罷登候處、

二月四日迄ニ五兩貳分相納メ、殘金貳拾七兩貳分御利足付ニ
成申候、此利貳兩三分右之内我等罷下り、二月晦日ニ金四兩
貳分上納仕候、就夫百六拾兩口皆納故、右上納相濟候得者早々
馬代金願書差上申度候處、右四拾兩之上納皆納不仕候内者、
指扣候様ニと御役所御押ヘ差扣申候所、馬不足甚手文申候、
依之皆納ハ不仕候得共、段々願書延引ニ罷成候間、先願書御
取上被下候様ニ、其内ニ茂隨分セリ立皆納可仕と相窺候處、
左候ハ、急ニも不濟事、先願書差出シ候様ニと被仰付故、左
之通立紙三月廿四日朝我等差上申候、且右馬金之内金拾兩同
廿五日ニ上納仕候

乍恐以書附奉願上候事

一下御町往還馬數追年相減申候而、馬代御金拝借奉願上候度毎
ニ申上候通、當時馬數貳拾七疋御座候處、此内病馬三疋御座
候得者、残り馬貳拾四疋ならでハ無御座候、又者当六年以前
亥年拝借被為 仰付候馬代御金百六拾兩、去卯暮迄皆納仕候
得者、自分馬ニ罷成候ニ付、勝手ニ売払申所存之者も相見ヘ
申候、左候得者段々馬數相減申候儀と奉存候得者、往還御用
之儀者扱置、御上之御用、御家中様方御用ニ茂手支申儀御
座候

一 御用之儀者、御城御評定所御藏方・御看方・御買物方并御家
中様方往還之儀者、御代官領、府中・松川御陣屋、笠間・
岩城・相馬常輪之通、其外仙台・南部・秋田・津輕筋之通、
先年ハ無御座候所、近頃不時之通御座候故、馬數減少仕候而

者別而差支申候義、度々御座候、御当地様子御存知の方ハ、左様ニも無御座候得共、不勝手之衆中ハ立腹被致候得共、御城下之事故、諸事差扣被申候儀と奉存候、下々之族ハ遠慮無之、凶事出来可申哉と安心不仕候、左様之節ハ鄉村ノ薪売等之馬を雇、又者小鶴・長岡、枝川等ノ商人荷物付參候馬を相雇、付送り間ヲ合候儀も度々御座候、夜ニ入左様之馬も無御座候節ハ至極迷惑仕候、其上当中江戸表大火ニ付、奥筋御家中飛脚日ニ七、八人も往来御座候得者、此節甚タ手支難義仕申候ニ付、奉願上候ハ、馬疋足ニ付御金拾兩宛、三拾足分、前々之通無利足五ヶ年賦拝借被為 仰付被下置候様ニ奉願上候、右之通往還駅馬不足ニ付至極難義仕候間、御 仁恵之御了簡を以、願之通被為 仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、以上

明和九年

辰三月

加藤三郎兵衛

江幡次郎衛門

御町御奉行所様

右之願書三月廿四日朝御役所江差上申候

一先達而被願出候馬金拝借之儀、金百六拾兩廿足分相濟候間、前例之通手形仕出シ可被有之候、以上

四月廿八日

右之通御達御座候間、廿九日ニ御奉行様并御役所四ヶ所へ御礼

申上候、右御礼之儀、富永兵七様御指図ハ自分礼ニも無之、御町御用之願ニ有之候間、重而願之節ハ御礼ニ罷出候ニも及不申候義と御達ニ御座候、重而見合ニ留置申候手形仕出シ、五月九日前迄に指出可申候由被仰付候、四日御評定ハ相延候故如此候、以上

○^朱一

一於江戸ニ相馬彈正少弼様御死去、御遺骨御国元江御下り、当所五月二日ニ御通り、我々兩人麻上下ニ而罷出候、尤兩人江金百足宛式百足被下置候、人馬指引同心衆式人罷出候事

○^朱二

拝借仕馬金之事

一文金百六拾兩小粒

辰暮今申暮迄五ヶ年
老ヶ年金三拾式兩宛

右者下御町往還荷物附申馬不足ニ付、為馬金無利に拝借仕候所実正ニ御座候、但上納仕様者、辰暮今申暮迄前書金割之通五ヶ年ニ前暮上納可仕候、尤面附手形私共方江取置申候間、連判之内死失絶前御座候ハ、相殘候者共為相弁、屹ト上納可仕候、依如件

問屋

加藤三郎兵衛

同

江幡治郎衛門

明和九年

辰五月

右之通為致拝借候、致遲滞候ハ、我々共申付上納可為致候、以上

御町年寄
上田作十郎

同
岩田太郎衛門

同
加藤彦市

中山庄司左衛門

佐野四郎衛門

西郷半左衛門殿

岡部伊左衛門殿

此所らい紙置申べく候

右手形相認メ御月番之年寄江印形例之通頼入候由、致持參候得者、御月番同役中江茂被相廻請取申候、七日ニ御役所江差上申候、九日夕罷越窺候ハ、今日拝借手形御加裏判被下置候哉と相窺候、成程御判者相濟候得共、大吟味衆差紙不問ニ合候故、十四日ニ相渡候筈之由御達御座候、左候得ハ十五日朝手形御加裏判相濟候間、請取ニ可罷成と御呼出ニ候間、罷出手形并御差紙請取申候、翌朝御役金方江罷越、尤去暮分不納拾五兩御座候所、此内十式兩取立納申候、依之百六拾兩拝借之内三兩御引上ケ百五拾七兩請取申候、直ニ鼠町御役所様へ右無相違相請取候段訴申候、且不納之分も十五兩都合ニ上納仕、百五拾七兩持參

仕候由申上候、夫々加藤彦市殿へ持參相頼置申候

一此度拝借金之儀者不残分限役ニ申付候間、面附撰指出候様ニ四月中被仰付候間、左之通相撰五月初ニ差上申候、尤故障之義も有之間、内々差出候様ニと被仰付、同役兩人にて相撰、年寄中江も内々一枚差出申候

覚

落合長四郎

高野惣治郎

紺屋町
伊左衛門

七軒町

九兵衛

七軒町
留之助

七軒町
喜兵衛

七軒町

惣介

田中町
利兵衛

田中町
久衛門

本四町目

太兵衛

本四町め
伝六

紙町
伝兵衛

本五町目

伝衛門

本五町め
庄兵衛

本六町め
治郎三郎

本七町目

九兵衛

拾六人

一此度拝借金之儀之者、兼而御役所様思召、八兩馬金ニ而ハ拝借之者難義之趣、其元方段々申聞も有之間、何卒拾兩馬金ニ願可遣と段々願候得共、件之通八兩馬金ニ相濟候間、是ヲ内内者役所一通ニ而拾兩馬金ニ致可申候間、拾六人撰被仰付候、尤撰書付十四日ニ於御評定御奉行様迄御覧之处、尤之由御判談相極、撰之通拝借被仰付候間、早々名主共江以手紙可申達旨被仰付候ニ付、早速十五日ニ申達候、且落合長四郎義ハ直

訴直任も致候事故、此方々可申達由御達御座候

一 右面附十五日ニ加藤彦市殿江も先達而内々懸御目候通、今日御役所分被 仰付候由申出候、尤御金明十六日請取候間、十七日ニ於貴宅相渡申度由御立合可被下、弥明十七日御金渡二候間、拝借人名主同道いたし請取候様、廻状御出可被下と相頼申候

一名主中々十六日夕年寄衆江、此度馬金之儀ニ付品々願之振申出御座候ニ付、我々も彦市殿宅江被呼出、五人罷出候所、年寄衆三人にて被申候ハ、今夕別紙之通願振之書付御役所江差出呉候様ニと名主一同致持参候、依之披見之上、各々も書付差出シ候様ニと達故、一覽之上兩人ニ而相談之上相認、十七日朝年寄中江差出申候、書付永キ事故是ヲ略ス、左候得ハ、兩方之書付并年寄衆も認書上田氏御役所江被致持参候処、先此書付之義者追而相糺、其節差出可被申候、馬金之儀者二月・三月ニも渡シ可申候処、去暮上納不納之者在之故、大キニ致延引問屋前御用手支候間、今日早々御金可相渡候由御達故、急ニ名主并拝借人呼出左之通相渡申候、尤名主之内病氣之由名代組頭出候所ハ六町目・七町目、曲尺手ハ如何心得候哉、何之意味も無之罷出不申候、四町目ハ四・五日此方病氣ニ相違も無御座候、罷出候名主ハ七軒町・肴町計ニ御座候、右ニ留置候金三両之不足、当月中渡可申と田中町久衛門江我々証文相渡申候

覚

一金拾両 落合長四郎

此馬壹疋

一金拾両 伊左衛門

此馬壹疋

一金拾両 留之助

右同断

一金拾両 惣介

右同断

一金拾両 久衛門

右同断

一金拾両 大兵衛

右同断

一金拾両 伝衛門

右同断

一金拾両 治郎三郎

右同断

但 当辰暮分申暮迄五ヶ年賦
老正ニ付金貳両宛

惣ノ金百六拾両

此馬拾六疋

右者下御町往還馬不足ニ付、我々拝借仕候所実正ニ御座候、上納仕様者当辰暮分申暮迄五ヶ年賦無利足、但シ金三拾貳両宛毎暮屹ト上納可仕候、万一上納相滞之者御座候ハ、惣人割ニ而相弁上納可仕候、依如件

一金拾両 高野惣治郎

此馬壹疋

一金拾両 九兵衛

此馬壹疋

一金拾両 喜兵衛

右同断

一金拾両 利兵衛

右同断

一金拾両 伝六

右同断

一金拾両 伝兵衛

右同断

一金拾両 庄兵衛

右同断

一金拾両 九兵衛

右同断

明和九年

辰五月

前書之通、御金御定之通每暮無遲滯上納可為仕候、以上

問屋

加藤三郎兵衛

同

江幡治郎衛門

御町年寄

上田作十郎

同

岩田太郎衛門

同

加藤彦市

御町御役所様

右折紙ニ而印形取御役所江当日相納申候

指上申一札之事

文金百六拾兩小粒

忝人ニ付金拾兩宛、当辰暮今申暮迄
金三拾貳兩宛五ヶ年賦上納

右者下御町馬不足ニ付、馬金無利足拝借被 仰付候ニ付、別紙
面附之通拝借仕候、前書之通五ヶ年中暮々屹ト上納可仕候、万
一上納相滞候ハ、何分ニ茂可被 仰付候、無遲滞屹ト上納可
仕候、依如件

落合長四郎

高野惣治郎

紺屋町

伊左衛門

七軒町

九兵衛

同町

留之介

同町

喜兵衛

同町

惣介

田中町

利兵衛

同町

久衛門

本四町目

伝六

同町

太兵衛

紙町

伝兵衛

本五町目

伝衛門

本五町目

庄兵衛

本六町目

治郎三郎

本七町目

九兵衛

右之通馬金分限役ニ而拝借被 仰付候ニ付拝借為仕候、面附之
通御金為請取申候、万一上納相滞候者御座候ハ、惣人別ニ而
為相弁、屹ト上納可為致候、依之加判仕手形為差上申候、以上

七軒町名主

与左衛門

有町名主
五左衛門

本四町め名主
五郎衛門

本六町め名主
伝五衛門

本七町め名主
武左衛門

曲尺手町名主
弥一兵衛

明和九年辰五月

加藤彦市殿

岩田太郎衛門殿

上田作十郎殿

江幡治郎衛門殿

加藤三郎兵衛殿

右者立紙ニ致印形取、金子年寄衆立合ニ而相渡申候、此手形者
加藤彦市殿方へ受取置申候、但名主加印ハ願之義も在之候故、
追而取候共、先今日者取不申候由、年寄衆中名主江頭取不申候
一下町惣名主十六日夕年寄中迄願書之義、段々年寄中答被聞
候処、答不相成義も在之、其外越度ニ罷成候共、不苦敷候由
願等ニ而其分ニ難相濟趣、年寄中立腹被致、段々御内意茂も
座候哉ニ而、惣名主十八日夕四ツ時林平八を以年寄中迄遠慮
申出候、其後年寄中々御役江も御内意被承候処、惣遠慮之義
御用御手支ニも罷成候義と相見江、十九日朝遠慮相濟申候
右者問屋役取計之儀ニ付、願出候事故留置申候、委細之義八年

寄中ニ而留置被申候

一此度之馬金渡シ役馬金三両ニ相極させ為渡申候、尤耄人限証
文受人相立、左之通手形差図致候、尤各様ニ而御渡シ被下候
様ニと願人も御座候得共、其儀者役柄不相成候、受取人江馬
さし同道可參候間、其元ニ而渡シ可被申と相達申候

相渡申馬役請取之事

一金三両也

右者此度其元様馬金御拝借被 仰付候ニ付、当辰より申暮中迄
五ヶ年之内、馬役私共江右之金高を以御渡シ被下ニ付、右之金
子隼ニ請取申候、馬役之義問屋前御用次第不限昼夜、屹ト相勤
可申候、万一馬損等仕候敷、又者如何様之義御座候共、請人引
請五ヶ年之内無遲滞番役為相勤可申候、為後日之依而如件

三間町
權介

明和九年辰五月

請人

本五町目

(空白)

釘屋庄兵衛殿

右郷分江渡シ候馬者、御町内江世話人頼置、通達次第早速御用
相勤可申候、此文言右之証文江書加江申候

馬請取之者之扣

一紺屋町 伊左衛門分

古宿村 十蔵

一七軒町 九兵衛分

台町 仁衛門

一同町 留之介分

茂沢村 平十

一同町 喜兵衛分

同村 藤十

一同町 惣介分

同村 喜平太

一落合長四郎分

肴町 惣七

一本四町目伝六分

同町 利兵衛

一同町 太兵衛分

茂沢村 太兵衛

一紙町 伝兵衛分

本六町め権三郎

一本五町め伝衛門分

吉沼村 文治

一同町 庄兵衛分

三間町 権介

一本六町め治郎三郎分

本六町め長十

一本七町め九兵衛分

木沢村 善十

一高野惣治郎分

東ノ 武兵衛

一田中町 利兵衛分

栗崎村 十蔵・浅衛門

一同町 久衛門分

是ハ自分馬

ノ拾六疋

右渡シ廿日迄ニ金子渡シ極り、其後我々江申出并受取之者も不
残罷越申候、其節申渡候ハ、五ヶ年之内馬損等致候ハ、早速
相調、とかく拝借人江苦難相懸ケ不申、無遅滞番役可相勤旨申
達候

一廿日夕上田作十郎殿御用之儀御座候間、只今御出可成候と
手紙早刻参り候間、所左之通加藤彦市殿・作十郎殿列座ニ而
我々兩人江被申聞ニ付留置申候、尤御役所様御物語認書ニ候
由達ニ御座候、且林平八江も忝枚相渡り申候、是ハ其元宅江
名主共寄り合ヲ付、為読聞可申と達御座候

御物語之心覚

一御町ニ而役義相勤候者共ハ、重軽ニよらず別而万事を慎候而、
御用席ハ猶更不礼不口上無之、支配在之者ハ支配之者ヲ指引、
支配ヲ請候者ハ夫ニ随イ、双方得ト申合候ハ、御用向茂無
滞相并次第も宜可有之候所、心得違之者茂在之、權威ヲ立、
或者申掛り之義ハ不弁是悲ヲ、上ニ立候役人之不用指図をも
候得者、自分之存寄計ヲ用イ候様成ル儀ニ相聞、自然と無用
之儀ヲ專ニ致候様ニ相成候故、御用滞不宜候、都而御用向權
柄ニ無之、柔和ニ申合候様ニ段々可申、伝候由御物語ニ御座
候

辰五月廿日

右馬金手形立紙江名主加印、廿一日ニ上田氏宅ニ而名主寄合
之上相済申候、尤弥一兵衛支配ハ高野惣治郎殿加印不仕候、
此義年寄衆ニ而御役所江伺之上如此候

一三

乍恐口上之覚

○(朱) 一問屋前詰歩行夫并諸人足、七軒町支配ハ曲尺手町支配迄
差出候人足之儀者、只今迄歩行夫役共江申付為差出申候、台
町支配・九町目支配・新町支配、右三支配ハ出人者、名主江
書付を以申遣候

一 歩行夫役共江申付候人足之義ハ、御用持出人足并御家中様持出人足、其外往還御用人足・詰歩行夫申付候刻限、近年度々遲滯仕、甚御用御手支等ニ罷成、御役所様御苦難ニも罷成候義、度々御座候得共、私共内々申訳仕相済申候事、度々之儀ニ御座候而難義仕候

一 御 公儀様御代官蔭山外記様此度御用ニ付、奥州江御下り被成候処、小名浜水戸通り上州海老瀬村迄御通りニ而、去ル五日夜者介川御泊り、六日夜当所御泊り之積り、尤人足拾三人、馬式疋御用之由、御先触五日昼七ツ時過ニ當着仕、早速大足村江相送り申候、当町御泊り宿紺屋町清衛門申付、差置申候所、六日朝五ツ半時、介川村ハ御仕出之追触當着仕候ハ、其御町六日夜泊り之所、泊り順惡敷在之候ニ付、六日夜者大足村へ泊候条、其町宿不及心懸ニ候、依大足村江宿割之一通遣候間、早速遣候様ニ刻付を以御狀當着仕候間、早速刻付ニ而大足村江相送り申候、左候得者、人馬共ニ早速ニ揃置不申候得ば、御間ニ合不申候ニ付、人足之儀者歩行夫役佐衛門江、式拾人即刻差出候様ニ申付候、尤歩行夫役共指出候人足者、例遲滯仕候間、無心元奉存、台町詰歩行夫四人之者ヲ遣可申と、跡番も台町四人申遣候、馬之義者六疋差出候様ニ馬指江申付候、右御用人足歩行夫役共指出申候、人足式拾人之内四ツ半頃迄ニ、式三人ならてハ罷出不申候間、ケ様ニ而者御間ニ合申間敷、只今相揃可申と伝衛門・佐次衛門江申付候所、段々遲滯仕、九ツ過迄ニも相揃不申候、左候得者無間茂御用

長持老婢六人持參申候所、歩行夫役指出申候、人足不足ニ御座候故、詰歩行夫を相加へ、大足村江相送り申候、又々手代衆御出乗懸式疋・嫁馬式疋指出申候、右先触參候砌、外記様御先見ニ舟渡迄人足五人指遣置申候所、只今舟ニ御召被成候由、九ツ過ニ罷歸り申候、左候得者無間茂御出可被成奉存候得共、人足揃兼埒明不申候間、歩行夫役共呵候得共、兎角遲滯仕、御間ニ合申間敷ト甚指支申候ニ付、問屋揃ニハ治郎衛門老人罷在、三郎兵衛并三町目と十馬指共式人、人足催促ニ罷出申候而、追々人足為指出申候、然者無間茂外記様御出被成候而、人足揃不申候得共、御駕籠者直ニ継送り申候所、御荷物式荷相殘、本老町めニ御駕籠御扣被成候而、問屋參候様ニ、若堂衆馳參候間、治郎衛門老町目江罷越申候所、外記様被仰候ハ、如何人足遲滯致候哉、御用差支ニ罷成候由、御立腹ニ御座候間、旁御申訳仕候内、人足も追々相揃、御立腹も無何儀相済申候而、大足村へ御越被成候、右申上候通、人足即刻式拾人差出候様ニ申付候得共、漸御通之砌迄ニ拾式人指出申候、台町人足五人召遣イ申候、都合拾七人御用差出申候、右申上候通、歩行夫役共、我々兩人ニ而数度嚴敷申付候得共、御通之砌御間ニ合不申、甚手支難義仕候、外記様御立腹之義、御上之御苦難ニも可罷成と甚難儀仕候所、御内々ニ而無何義御済被下候、此上共ニ歩行夫役共人足取扱ニ而者、又々如何様之義可有御座哉、御上之御苦難ニも可罷成と甚安心不仕候、尤台町九町目新町名主江人足申遣候節者、無間違御用相弁申候、依之只今迄歩行夫役共取扱申候場所も、台町九町

目新町之通名主々江詰步行夫并人足申遣、都而名主取扱ニ罷成候ハ、御用御手支も無御座、御用相并可申と乍恐奉存候、何卒名主取扱ニ被仰付被下置候様ニ奉願上候、以上

辰十月

加藤三郎兵衛

江幡治郎衛門

御町御役所様

口上之覚

一 問屋前諸人足、只今迄ハ步行夫役江申付為差出申候所、人足度々間違等出来、御用御手支ニも罷成候ニ付、先達而口上書を以御役所様へ委細申上候処、就夫此後如何取扱間違等も無御座、御用相并可申哉と御尋ニ付、左ニ懸御目申候

一 台町新町九町目支配人足ハ、只今迄御用人足書付ニ仕、步行夫役ニ為持遣申候所、名主ニ而支配下江人足申付、大方者無間違差出申候

一 七軒町ハ曲尺手町支配迄者、人足只今迄者步行夫役江申付為指出候所、此後者台町九町目新町之通、七軒町ハ曲尺手町迄も御用人足書付ニ仕、步行夫役ニ為持遣、名主方ニ而是を請取、帳面之仕立置是を扣、右使之步行夫役江順番之書付相渡、為当テ若間違も御座候ハ、名主方ニ而相改差出候様ニ仕候ハ、御用相并、其上御町内之者費も無御座、悦可申義と相見ヘ申候、併名主方ニ而者、只今迄よりハ世話多罷成、迷惑可仕候得共、支配下之者救ニ罷成候得者、世話仕可然義と相見ヘ申候

右之通七軒町ハ曲尺手町迄之人足茂、台町九町目新町之通名主取扱ニ仕候ハ、間違も無御座、御用相并可申と奉存候、右存寄御尋ニ付、前件之通懸御目ニ申候、以上

辰十一月

加藤三郎兵衛

江幡治郎衛門

御町御年寄衆

一四
○^朱

口上之覚

一 問屋前ニ而口前と申錢等請取申義、先規ハ無御座候一御領分・他領共ニ商人諸荷物、問屋前ニ而引請継送申候荷物之義者、先年ハ庭錢都而請取申候、是ハ在々問屋前ニ而茂、商人荷物ハ同様庭錢請取申義ニ御座候

一 大貫・磯・中湊・平磯・馬渡、右浜々ハ西場筋江肴荷物指遣候分ハ、御町問屋前江相掛、庭錢相払罷越申様ニと、先年も度々被為 仰付候ニ付、是又庭錢請取申候義ニ御座候

一 馬士共駒之口取候義者、在々御町江手前馬參申候而荷物付出申候分、老駄ニ付廿四錢宛取申候、若老駄ニ不足之荷物者、右ニ順シ請取申候、是又先年ハ請取来り申候

右之外問屋前請取候義無御座候、以上

辰十二月

加藤三郎兵衛

江幡治郎衛門

御町御年寄衆

辰十二月廿三日

岩田太郎衛門
加藤彦市

一五
○^米

口上之覚

一 歩行夫役共御町人々差出候人足、前錢等請取候而請合候義、已來無用ニ可致由申付候間、御町人共々も錢にて相渡不申、人足ニ而指出候様ニ可相達候

一 問屋人足当テ候ハ、書付ニ而歩行夫役へ申付、名主へ申遣候様ニ可致候、名主々支配江当テ候義ハ、帳面ニ致置、不同無之様ニ右之歩行夫役江申付、為当候様可致候、尤歩行夫役共權柄ニ当放等ニ不致心を付、名主得指図を取計可申候

一 高橋久之衛門人足之儀者、書付ニ而歩行夫役參可申候間、書付歩行夫役共、名主江致持參、得指図人足当テ候様可致候

一 御証文歩行夫之儀、歩行夫役共へ申參候節ハ、是又名主得指図当テ可申候

一 御家中様持出人足、縦式人持と申來り候而茂、持兼候節者、外増人足何人と問屋吟味之上、名主へ書付にて可申遣事

一 人足歩行夫改之儀者、高橋久之衛門并問屋名主書付を以、突キ合候義も可有之候間、此旨相心得可申候事

一 支配切人足歩行夫出払候節者、名主々名主へ書付ニ而可申遣、定使等口上ニ而申送間鋪事

右之趣同之上申達候様ニ被 仰付候間、相触候、以上

上田作十郎

一六
○^米

請取申初之事

尚々、早々相廻シ留り々無延引御返し可被成候、以上
右廻状之趣、年寄中々我等方江茂為知ニ有之候故相扣申候右被仰付候通、人足之義、当已正月元日々名主江申遣候

河合吉郎衛門殿
高岡 五衛門殿
田中五左衛門殿
飯沼五郎衛門殿
矢口吉左衛門殿
高橋伝五衛門殿
金沢武左衛門殿
吉田弥一兵衛殿
綿引 勘衛門殿
塩崎伊左衛門殿

一 初拾表ハ、但四斗式升入
一 初拾表ハ、但四斗式升入

右者問屋役相動候ニ付、為御合力被下置候間、為請取申候、仍

本四町め問屋
江幡治郎衛門
本五町め問屋
加藤三郎兵衛

如件

安永二年巳正月

中山庄左衛門

佐野四郎右衛門

石川 久助殿

江幡忠兵衛殿

若林源之衛門殿

右之通相認、正月廿三日ニ御役所江差出申候而、廿九日ニ御裏判相濟渡り申候、翌二月朔日ニ馬場義七殿へ頼遣候所、二月十日ニ初拾九俵と壱斗七升渡り申候而、十一日ニ鼠町江御礼ニ罷越候、義七殿へ進物手前々遣申候

一七
○^朱

一問屋役相勤候者江御合力初被下置候義者、其者江被下候哉、又者役義江被下候哉、何年以前々頂戴仕候哉、委細書上候様ニと三月廿五日ニ同役御呼出被 仰付候、尤大吟味様々御尋ニ御座候由、御咄シ御座候、依之先役共留帳改候得共、何年以前如何様之訳ケにて頂戴仕候哉、留帳一向無御座候、左候得者江川次郎衛門方承候得者、古キ留ニ御座候由、写シ呉候間、直ニ御役所江差上申候処、御役所御留帳ニ頂戴之儀相見江不申候由、其後江川次郎衛門方書付之年号を以、亦々御留帳御吟味被遊候処、御見出し被成、委細ニ相分り申候、尤江川次郎衛門方書上御留帳とハ殊之外相違ニ御座候、年曆等迄

違申候故、用立兼候間、書留不申候、御役所様御留之書付被下置候間、左之通留置申候

一初式拾俵

本四町目問屋

治郎衛門

此者義、数年律儀ニ問屋役相勤候段、御町奉行中願之趣達御聞、為御褒美初式拾俵被下置候旨可申渡者也

元禄十二年卯十月廿六日

右次郎衛門事、身軀不^御恕意相成、問屋役難相勤候に付、問屋御免被遊候様ニと御訴訟申出候ニ付、其段申立候処、為御褒美被下候也

一

本四町目問屋

伊兵衛

右病氣ニ付役義御免之願申出候、願之通役義御免被遊候

元禄十六年未六月十九日

一

本三町目

勘平

問屋伊兵衛役義御免ニ付、跡役被仰付候

右問屋役相勤候者共江ハ、菅人ニ御役料初拾俵宛、兩人江毎年式拾俵可下置候、且又家普請等仕候ハ、問屋役仕候内、其身一代ニ壱度宛御材木可被下置候

元禄十六年未六月十九日

右之御留、同役三郎兵衛方江も写シ遣申候、上御町年寄加藤彦

市殿江も一枚遣申候

巳八月

一八^朱

本町通詰歩行夫出人扣

一台町	七拾六人	一七軒町	拾三人半
一裏一式町目	七人半	一本壺町目	拾式人
一本式町目	拾六人	一本三町目	拾五人
一本四町目	拾四人	一本五町目	拾七人半
一曲尺手町	拾三人半	一八町目	拾壺人
一九町目	拾四人	一十町目	拾五人
一下新町	七拾九人	一赤沼鍛冶町	拾五人半
一白銀町	拾七人		

右詰歩行夫、此度壺編通り出人高相改申候、依之間屋前江日々出人相改、右人数ニ附合可申候、若過不及等も有之町ハ其支配名主江申遣、若出人高通都合為詰可申候事

安永二年巳八月

右之通相認メ、問屋場江張紙指置申候

巳八月

一本町通詰歩行夫、賃持出シ人足

一裏町通歩行夫、賃寄人足

右口口之出人、此度通帳本町・裏町と式冊拵、名主方江遣改申候間、老度切ニ右通江何方江何人と相印割判仕、歩行夫役之者江為持遣為指出可申候事

一九^朱

乍恐口上之覚

一中山備前守様
一御城代様
一御老中様
一御若老様
一御側御用人様
一御用人様
一御目附様
一御鷹匠様

一持出シ人馬之儀、問屋前ニ而先年取扱候儀者、御用并前件之御役人様々問屋前江被仰遣候得者、問屋前々申付指出、其外之御方ハ馬者馬指方江被仰遣、馬指方より申付、指出人歩之儀者御手前様々直ニ御雇被成候処、享保二戌年 源肅公様御在国之砌、御定勤之御家中様方御国御不案内ニ候故、人馬御雇被成候義御手支被成候由、仍問屋前江被仰遣次第御世話申候様ニ被仰付候、併御定勤之御方様計りと申候而者、御国勤之御方様も入交り候而、紛敷候間、此度者都而問屋前江御頼被成候者御世話申候様ニと被仰付候由、先役共々申送りニ御座候

御発駕被遊候ハ、早速前振之通御用并御役人様計、問屋前
ハ申付指出可申處、先役共心得違ニ而、御役人様之外江も、
人馬共ニ問屋前江被仰遣候得共者、御町役ニ而申付、指出候
段、先役共我々共迄不行届不取計之次第、何分ニ茂奉忍入候、
御町内ニ見懸ケ商仕候而、間々ニハ日雇渡世仕候者茂多御座
候所、数度之類焼ニ而困窮仕、致方無御座御家中様江半季奉
公、又者町付之畠入作等相求メ、農業ニ相懸リ申候而、日雇
之者少ク、相雇申候ニ茂日雇錢高直ニ在之、式百文或ハ時節
ニハ百五六拾文位ニ而漸相雇、御町役ニ指出シ、縦式人と申
来候得者、式人差出シ申候所、持品重ク候故、三人扱ハ四人
ニ而持送り候儀も御座候間、其節ハ其分増錢をも被下候様ニ
相願候而も相濟不申、式人前之賃錢ならでハ相渡リ不申候、
勿論右賃錢者相雇指出し候者江請取候ニも無之、被雇罷出候
人歩之者共所務ニ前々ハ仕候間、全ク之御町役歩同様ニ指出
シ、御町之者共猶更悉ク難義仕候、殊ニ先年と違、近年者岩
城・相馬之外ニも津輕・南部・仙台之御家中通り茂在之、人
馬出辻多ク罷成、馬指共之儀も前々ハ、馬金拝借馬之外六七
拾疋程も、自分之馬持候者も御座候而指出シ申候所、當時者
馬金拝借馬之外ハ、自分馬も無御座候故、殊更手支申候、依
而御用并御役人様計、是迄之通問屋前江被仰遣次第、人馬共
ニ問屋前ハ指出シ、其外之御方様ハ、馬之義ハ馬指方江被仰
遣、人歩者御手前様ハ直々御雇被成候様、先規之通上御町同
様ニ仕度奉存候、何とそ右之通被 仰付被下置候様ニ、偏ニ
奉願上候、以上

安永二年巳十月

加藤三郎兵衛印

江幡治郎衛門印

御町御役所様

口上之覚

一 中山備前守様

一 御城代様

一 御老中様

一 御若老様

一 御側御用人様

一 御鷹匠様

右御役人様ハ問屋前江持出シ、人馬被仰遣候得者、問屋前ハ御
町役ニ申付、賃錢通り並御定法之通相請取申候

但、長岡村迄

人足賃錢四拾式文

此持荷目方五貫目

本馬賃錢八拾四文

此乘下目方式拾貫目

掛荷目方三拾六貫目

輕尻賃錢五拾六文

此乘下目方五六貫目

一 御目附様御役所御一同江者

長岡村迄御定法江五割増

人足賃錢六拾三文

此持荷目方五貫目

御定法へ五割増

本馬賃錢百三拾文

此乘下目方式拾貫目

掛荷目方三拾六貫目

御定法へ五割増

輕尻賃錢八拾四文

此乘下目方五六貫目

右御役人様之外、御家中様ハ人足馬共ニ御定法五割増ニ相請取申候、尤長岡村迄人足御定法江五割増にて六拾三文、馬附之儀者本馬・輕尻之差別無御座、御定法本馬賃錢江五割ニ而百三拾文、何れ茂目方ハ御役人様之通

右者御役人様其外御家中様持出シ人馬賃錢、只今迄於問屋前相請取候次第書上申候、以上

巳十月

御町御役所様

加藤三郎兵衛
江幡治郎衛門

一持出シ人歩之儀、去十月中書上候処、所々相直し指出候様、

御書入被下候故相改、左之通書上申候

乍恐口上之覚

一中山備前守様

一御老中様

一御城代様

一御若老様

一御側御用人様

一御用人様

一御目附様

一御鷹匠様

一持出賃歩之儀、問屋前ニ而先年取扱之儀者、御用并前件之御役人様ハ問屋前江被仰遣候得者、問屋前ハ申付指出、其外之御方ハ上御町同様ニ御手前様ハ直ニ御雇被成候処、享保二戌年

源肅公様御在国之砌、御定勤之御家中様方御供ニ而御下り被成、御国御不案内ニ候故、人馬御雇イ被成候義御手支被成候間、問屋前江被仰遣次第御世話申候様ニ被仰付候、併御定勤之御方様計りと申候而茂、御国勤之御方様茂入交り候而紛敷候間、御在國中ハ都而問屋前江御頼被成候ハ、御世話申候様ニと被仰付候旨、先役共ハ申送り候由ニ御座候、左候得者、御免駕被遊候已後、早速前振之通相改、御用并ニ御役人様江計問屋前ハ申付指出シ可申筈之処、其後も右之移りニ而御役人様之外ハ問屋前江被仰遣候得者、先役共不心得ニ而、御町役ニ申付指出来り候段、先役共我等々共迄不行届不取計之次第、何分ニ茂奉恐入候、尤先年者御町内ニ日用渡世仕候者多ク御座候所、近年者数度類焼仕、其上世柄悪敷困窮ニ罷成、致方無御座、御家中様江半季奉公、又者町附之畠入作等相求メ、農業ニ相懸り申候而、日雇之者少ク、相雇申候に茂

日雇錢高直ニ在之、貳百文或ハ時節ニハ貳百五六拾文位にて漸相雇、御町役ニ指出シ、縦式人と申來り候得者式人差出申候所、持品重ク候故、三人扱者四人ニ而持送り候儀茂御座候間、其節ハ其分増錢をも被下候様ニ相願候而も相濟不申、三人四人ニ而持送り候而茂、式人前之賃錢ならでハ相渡不申候、勿論右賃錢ハ相雇指出シ候者共江請取候ニも無之、被雇罷出候人歩之者共所務ニ、前々ハ仕候間、人歩雇指出シ候御町人之者全ク之御町役歩同様ニ指出、御町之者共猶更悉ク難義仕候、殊ニ先年と違、近年者右之外ニも御用夫伝馬出辻多ク罷成、殊ニ岩城・相馬之外ニ茂、近年者津輕・南部・仙台其外奥筋之御家中通リも多ク在之、人歩出辻多ク、別而難義仕候、仍御用并御役人様計是迄之通問屋前江被仰遣次第人馬共ニ問屋前ハ指出、其外之御方様ハ馬ハ問屋前ハ指出シ、賃夫計御手前様ハ直ニ御雇被成候様ニ、先規之通上御町同様ニ仕度奉存候、左候得者、御町之者共大分成ル御救ニ罷成候間、何卒右之通被 仰付被下置候様、偏ニ奉願上候、尤御家中様御登り之節、一ヶ年之賃夫出辻大図左ニ書記入御覽申候、以上

一賃夫人足五百人程

是ハ御家中様御登り之節御屋敷様ハ全ク申來り候分

一同 三百人程

是ハ右申來り候外ニ増人之分

ハ八百人程大図

此度賃錢百八拾五貫文

但シ耆人ニ付貳百三拾文宛平均

安永三年午二月

加藤三郎兵衛
江幡治郎衛門

御町御役所様

二〇

○一大公儀御役人并後藤庄三郎役人、太田鑄錢座江四月廿五日ニ御下り歩伝馬、下御町ハ計出ル、五町目月番遣イ高書上ル

右御役人御用相濟御登り之由御内意御座候而、上御町江人馬被仰遣候間、人足五拾人、馬拾疋參候、左候得ば、先触六日朝參候、委細庭帳ニ有リ、遣高書上左ニ

覺

一人足 五拾人

上御町

内耆人 御先触長岡江

式人 御先見

八人 御証文

六人 賃人足

拾人 増人足

式人 荷押

ハ貳拾九人

残り人式拾耆人

内拾五人先へ返し申候

一馬 拾疋

上御町

内式疋

御証文

耆疋

姫馬

残り七疋

内三疋先へ返し申候

右者大行政次郎様・早川留三郎様今日御通りニ付、人馬遣高書上申候、以上

安永三年

午五月六日

御町御役所様

加藤三郎兵衛

江幡治郎衛門

二三
○朱

一同役加藤三郎兵衛病氣ニ付、月番相勤可申候所、役義被仰付、甚混雜有之候ニ付、御役所向キ計源藏相勤、其外ハ三郎兵衛方ニ而相勤候事

二四
○朱

御用留書附諸帳面引渡シ覚

一天和三御証文 壹枚

立紙
一御條目 三枚

一源良公様御通棺御法事中御用書付 壹袋

一御用留帳 貳冊

一右御用留小帳 壹冊

一馬金取立帳 五冊

一馬金手形拝借 壹卷 三封

一永田九平治様人馬賃錢間違一卷 貳封

一庭帳 三冊

一同古帳 貳拾四冊

但、請取後改候所、内貳冊者馬金拝借願下書ニ候、依而其段先役治郎衛門方江通達致置候事、右願下書ハ立紙三拾本と申候方へ組入置候事

一同横折帳 七冊

一立紙 三拾本

二三

覚

○朱 一安永三年午十月十日、鼠町 御役所江被召出、江幡治郎

右衛門後役問屋林源藏方江被 仰付候

御月番 富永兵七様

吉川甚兵衛様

被 仰渡候

年寄 江幡次郎右衛門殿

出座

名主五衛門

一横折紙 五枚

一馬金拝借面附帳 貳冊

一手帟 五通

一切紙 御目附方々御達書 壹枚

一枝川々請取書 壹枚

一元禄年中書付 貳枚

右者先々問屋々送り御用諸帳面書付改相送り申候、以上

安永三年午十月

江幡治郎衛門

林源藏殿

右之通送り之通り受取候ニ付、則前書之通り相認、受取書遣ス、尤末文言左之通

覚

一前書之通件々認

右者先々問屋々相渡候御用諸帳面書付共慥ニ請取申候、以上

安永三年午十月

林源藏 印

江幡治郎衛門殿

覚

一馬金上納小手形 貳枚

但シ、金高三拾貳兩宛辰巳二ヶ年分

右者御役金方々請取小手形慥ニ受取申候、以上

安永三年午十月

林源藏 印

江幡治郎衛門殿

覚

一本貳町目松屋茂兵衛馬金拝借手形壹枚

一本三町目堺屋三郎左衛門馬金拝借手形壹枚

貳通

右之通慥ニ受取申候、以上

安永三年午十月

林源藏 印

江幡治郎衛門殿

右之通送改受取申候、先役江幡次郎衛門殿々相渡り、則請取書付遣候事

二五

○一安永三年午十月十五日岡嶋藤左衛門様定勤之御目附ニ被

仰付、後役御町奉行近藤造酒衛門様被 仰付候ニ付、御祝

義申上候

二六

○一十月十七日御役所江罷出口上ニ而申上候者、私義類焼後

小家住居罷在候所、問屋被 仰付、諸荷物請払詰夫等指置候

場所も無之候間、本三町目堺屋次郎平方相頼申度奉存候旨御

伺申上候、御月番富永兵七様御挨拶ニ先役方ニ而も右之振ニ

在之候得者、相済候事とハ相見江候処、一応御相談之上被
仰付候趣ニ而罷歸り候事

十月廿日

富永兵七

林源藏殿

吉川甚兵衛

二七

○^朱一生荷通り刺銭受取之儀、五町目同役三郎兵衛方江も及相
談候処、手前方ニ而計引請取立テ呉候様ニ申候間、則十月十
七日手前ニ而計取立申候事

但六月先役御免後者十月十六日迄五町目同役方ニ而計
取立候事

二八

○^朱一十月十八日御役所御月番富永兵七様江御窺申上候ハ、私
義此度問屋役被仰付候処、先年類焼後家作等も不仕末小家掛
住居ニ罷在候得ば、往来諸荷物指置候場所も無之、詰歩行夫
指置候義も相成兼候ニ付、先役治郎衛門是迄相頼候本三町目
次郎平方相頼、問屋場ニ仕度奉存候、何卒右之趣ニ仕、御
用相勤度由相窺申上候、左候得ば申出之通小家住居役場勤り
兼候間、窺出之通り相済候事とハ相見候処、一応御同役様へ
御相談之上、御申越シ可被成候由罷歸候、其後廿日ニ御役所
御両名ニ而、左之通申来候
一昨日御申出候問屋場之儀、御申聞之通相済候間、左様御心得
可被申候、以上

右之通申来り候ニ付、先役治郎衛門方江罷越、御礼等之次第聞
合候所、とかく御役所へ相窺、御指図次第可然由申候ニ付、罷
出窺候所、兵七様御挨拶ニ自分事と違、御用へ抱り候事ニ候
得ば、御頭様方江御礼申上候ニ者及不申候由、御礼ぬけ候と申
事ニハ無之候由被仰候、左候ハ、御隣御同役様へ計可申上哉と
申上候所、夫ニも及不申候得共、是迄罷越候序之事ニ候へハ、
其趣申上候而も可然由被仰候間、則甚兵衛様江も御礼申上罷歸
り、右之趣年寄本役岩田氏へも申聞候、上田氏へハ江府留主ニ
候間、江幡氏ハ被仰通候趣ニ相頼候、本三町目支配四町目名主
太兵衛方江罷越、右之趣窺相済候ニ付、弥治郎平方頼可申候所、
故障も無之哉と尋候所、何之子細も無之候間、御頼可然様申候
ニ付、三町目次郎平方呼候而弥相頼候趣相達、十月廿一日ハ三町
目問屋場ニ而月番相勤候、右之段々同役三郎兵衛方江も委細申
聞候事

二九

○^朱一御家中様方御登之節持出入足之義、往元ハ御直キ雇ニ御
座候所、享保年中之頃ハ問屋場へ被仰遣、差出候趣ニ御座候
所、近年尚更人足遣イ高多ク相成、御町内甚難義仕候ニ付、
先役江幡治郎衛門御役義相勤候内ハ御願申上候、古来者御役
人様方御定御座候通差出、其外御直雇ニ御座候、何卒古来之

通ニ被仰付被下候様、又候此度御願申上候ニ付、則左之通被仰付候事

御役所様御達シ御書付之写

覚

一 中山備前守殿

一 御老中

一 御城代

一 御若老

一 御側御用人

一 御鷹匠

右御役江者本馬輕尻共ニ附出シも通次之賃錢ニ而人馬出シ可申候

一 御用人

一 御目附方部類

右御役江者本馬輕尻共ニ五割増ニ而人馬指出可申候

右之衆中ハ人馬申来り候者都而可出候、右之外ハ馬計可出候、件之通無相違様ニ取扱可申候、以上

安永三年午十二月

右之通御書付を以被仰付候処、尚又相決かたき御方様左之趣相認窺出候事

口上書

一大炊頭様

一 鉄蔵様

右御二方様之御家中様參勤持出人馬并ニ郷出ニ付人馬之事

御役所様御下ケ札ニ而、馬計出シ賃夫ハ出間敷候

一 中山備前守様

右同断

一 御役人様方

先達而申上候御方々様御屋敷御用事ニ而御入用人馬、并ニ

御附属或ハ御家来衆御自分御用事人馬之事

右御役所御下ケ札ニ而、御附属江ハ出間敷候

一 右御役人様之外、都而御家中様

右同断之事

但人歩之義ハ、此度被仰付之通奉畏候

右御役所様御下ケ札ニ而、馬計出シ賃夫ハ出間敷候

一 瑞龍御山

向御山

山御寺

右御代拜御法事其外ニ付、御役人様江人馬并ニ御役人様之外、御家中様方右ニ付御入用馬之事

御役所様御下ケ札ニ而御役人之外ハ馬計り出シ可申候

右之通被 仰付候事

三〇
○^朱

一安永五年申九月二日夕、府中御家中高橋小介殿と申仁、本四町目宿屋権十方江止宿被致候、右者此度 播磨守様 日光御参詣御帰り、宇津宮^マ塩子通ニ而太田瑞龍山江御参詣、夫々湊江御通行御城下江御懸り、江戸表江御帰府被遊候よし、為人馬宿割右小介殿御越シ被成候由、落合長四郎方江御物語御座候ニ付、長四郎方御役所様江右之次第申上候、依之御役所様本宅町目於御会所ニ、高橋小介殿江御対談都而御懸ヶ合御座候筈ニ付、為案内我々共権十方江罷越、小介殿同道御会所江案内致候、尤御門前迄案内致候、御玄関式台江御町組大山佐左衛門殿・中田富衛門殿罷出、御広間江案内被致候、我々も相詰居候事

一右御懸ヶ合之次第引続、右之御用向并ニ御城下御着合御滞留中御立跡迄之御用一件、別帳ニ書留老袋ニ致置候事

三一
○^朱

一馬指庄蔵永々病氣ニ付御暇被下、後役肴町字兵衛召抱度由伺出候所、右之通ニ可致由被仰付候、上田氏・江幡氏同席ニ御座候事

一九月十六日肴町字平馬指ニ召抱申候、長左衛門同席ニ而申付候事

三二
○^朱

一十月十二日小名浜御陣屋合御金荷物泊り宿藤柄町喜十順番ニ付申付候、都而定例之通取計申候事

三三
○^朱

一十八日暮合合讃州様并御連枝様御年始御使者御着ニ付、夜五ツ時右御用ニ付御会所江罷出候、吉川甚兵衛様左之通人馬御入用御達ニ御座候

一讃州様御使者分 人足式人 御城迄

右御帰路之節ハ人足壹人馬壹疋

播磨守様御使者分

雅楽頭様御使者分

駕籠人足八人

合羽箱持式人

馬 式疋

播州様御使者ハ

御城合青柳通ニ而太田瑞龍山江御出ニ付青柳江御先触遣候

雅楽院様御使者ハ

御城合勝倉通ニ而湊へ御出ニ付、勝倉江先触申遣候

但シ五町目月番故右之趣申遣候所、心得違ニて枝川繼之先触遣候、仍而翌朝勝倉江触直書状遣候事

大学頭様御使者分

人足四人

馬 壹疋

青柳通ニ而、瑞龍山江御出ニ付青柳江先触申遣候、御
歸リハ額田通下町坂戸次ニ而御歸リニ付、坂戸江先触
申遣候事

右人足 拾七人

馬 四疋

右之通ニ候所、雅楽頭様御使者御城ハ五町目吉野屋小兵衛宿江
御下リ御支度御直ニ而勝倉ヘ御越被成候、右人足御城江遣候者
直ニ遣候ニ付二人前ニ相立候事
此節初之外ニ馬壹疋御用之由被仰遣候ニ付、指出シ人足都合ニ
而者廿壹人ニ相成候、馬ハ五疋ニ相成候事

伝馬番七町目

歩行夫役番忠衛門

馬指 宇平

月番五町目ニ候所、不快ニ付右御用取計申候事

右十九日御立刻限明ケ六ツと御達ニ御座候、仍而人馬刻限十八
日夜七ツ時と申付候事

御先触者十八日夜中青柳・枝川江遣候

一吉川甚兵衛様御達右御用定例事ニ而、讃州様御使者長岡江
御着之節、早速通達致来之所、譬其儀無之共指定候事ニ候得
ハ、已来者右御着早速通達致候様、我々方ハ申遣置候様御達
ニ付、十九日長岡江左之通文通申遣候

以手紙致啓上候、未余寒強ク候得共、愈御安栄可被成御座珍
重奉存候、然者讃岐守様御年始御使者側昨十八日御着ニ付、

当所御役人様方御出張等御座候間、刻限為心得其御村々御着
之砌、早速此方江御通達被下度、以前ハ得御意御頼置可申候
所、甚取込之義ニ御座候而無其義候、然ル所右御定例事ニ候
得者、已来者ハ不得貴意候節ニ而も、其御御村々江御着早
速御通達被下候様ニ致度奉存候、其筋ハ茂右之趣得貴意置候
様との義ニ御座候間奉頼候、先ハ右之段得貴意度如斯ニ御座
候、以上

正月十九日

加藤三郎兵衛

中田銀七様

林 平八

東崎新五左衛門様

三四

覚

○(奉)十月九日
一人足拾貳人

内具足箱 壹人

御用長持 三人

駕籠 四人

挾箱 壹人

両掛ケ 壹人

竹馬 壹人

合羽籠 壹人

一本馬壹疋

一輕尻壹疋

右者蔭山外記義、検見御用相濟、明後九日明ケ七ツ半時小名浜
陣屋出立歸府被致候間、書面之人馬無滞指出置、尤渡舟場川越
在之所者、前後宿ハ致通達置、指支無之様可被取計候、泊リ附

左ニ記遣候間、可被得其意候、毎度先触及遲滞候而、悉遲着致候義有之間、先触請弘糺罷通り候間、宿々ニ而も請弘記置、此先触早々順達、留千住宿江戸下谷式ケ町外記御役所江可被相届候、以上

十月七日

蔭山外記手代

卯上刻出

堀越孝平治印

小名浜江判辰上刻

水戸通 千住宿迄

右宿々村々

名主 申屋 中

九日泊り安良川 十日泊り水戸 十一日泊り土浦

十二日泊り小金

追而此老封先触幸便を以相届ケ可給候、以上

御用 小池右平太殿

堀越孝平治

右御先触写早速御役所様へ指出ス

御宿本四町目

今出屋権重所

申付置候

十月十日 一外記様七ツ半時御着、手代衆江問屋ニ罷越候様ニと申越候間、

三郎衛門罷越候所、右手代衆被申候ハ、甚麁抹成致方ニ候、

御荷物参候而も取込候人も無之候、役人御宿ニ相詰候而も宜敷候所、其義も無之、尚更湯殿無之宿屋江御宿申付候段、い

かハの訳ケニ而ケ様取扱候と、以之外立腹被致候間、彼是申

訳、尚又湯殿之義者、類焼已来一同手狭ニ而罷在候間、何卒

御見済被下候様ニと申訳、漸相済候、以来心得之次第左ニ留

置申候

此後心得之次第

一御宿袴ニ而町木戸際迄、御迎ニ指出可申事

一御着前歩行夫式三人、歩行夫役兩人も遣置候而可然候事

一御着次第早速問屋罷越可申事

一御荷物三駄送ニ而来ル、依而才料相附遣ス、尚又此方ニ而も

御荷物江四人番人附置候間、其心得ニ而詰歩行夫等心かけ可

申事

一御宿江三郎衛門相詰居、尤御立之砌も罷出候事

一御賄之儀者、御上并手代衆一汁香四菜、下通り香三菜、御上

御膳部者御持参被成候事

但御上之献立者あミ方ハ相廻り候由之事

一夜立番式人町内ハ指出、其最寄江番所構候様ニと御役所様ハ

名主方江被仰付候事

一御宿払帳江加印致候扣

覚

一百六拾四文 御上御老人分

一八百七拾式文 御次七人分

ノ老貫四拾文

右者御検見為御用被遊御通行候处、当町江御止宿ニ付、御旅籠代書面之通被成御渡遣ニ奉請取候、已上

一鏹五百文

右者為御茶代被下置、難有奉請取候、以上

水戸下町本四町目
御宿 權十印

西十月十日

水戸下町問屋
林 平八印

右之外人馬遣高庭帳ニ委し、御出立明ケ七ツ半時、無滞御出立被成候段、御役所様江御訴申上候事

三五

安永七戌とし

○^(朱)一五月十八日泰更院様三拾三回御忌御法事ニ付、御連枝様方御使者有之所、御馳走御宿相止、御自分御旅宿ニ相成候、

人馬之儀者、何れ共相分り不申候ニ付、御月番吉川甚兵衛様江相伺候処、例年之通取扱候様ニと被仰付候間、伝馬三正程心掛候様穀町江申遣候、歩行夫ハ先ツ七人心掛候様、歩行夫役江申付候事

三六

○^(朱)一御為替会所太賃帳附出し、相印呉候様ニ頼有之ニ付認遣ス、尤馬者構不申候得共、川岸通付附出候義故、只太賃帳計り認遣ス、為念留置候事

五月廿一日

三七

○^(朱)一急御呼出ニ而別紙之通先触指出罷通り候者ハ無之や、御尋在之候処、一向左様等者罷通不申候、此後心を付、万一見当り候ハ、早速可申出旨御達之事、則左ニ先触写并人相書留置申候

水戸殿御密御用ニ付我等相通候、村々宿々鞍馬一疋人足老人無恙可指出候、若相滞候ハ、村々越度可為候、此廻状刻付を以早々相廻、水戸殿御城迄十六日九ツ時迄ニ相届ケ候様ニ可被致候、已上

水戸殿御家老山辺兵庫頭使

戊五月十二日 亥上刻出 花輪衛門之介印

右之者人相書庭帳ニ委シ

一風呂敷包ニ

水戸殿内塙衛門之介と認候札指候よし

右之者房州保田村金谷村・萩生村・百首村ニ而舟ニ乗、江戸小網町江着船、夫々行衛不相知候旨

右之通之もの見当り候ハ、押置、早速御注進可申候事

三八

○^(朱)一

津輕

成田元衛門

花田伊茂八

右之仁被申候者、来月下旬津輕越中守爰許罷通候所、人馬指支なく可被指出哉、道筋為見分罷通候由、被申候ニ付、委細致承知候、何分無滯繼立可申趣相答候所、左候ハ、我等為念請書與候様ニと被申候間、今出屋権十所へ宿申付、右之趣御月番阿久津左市様へ申上候處、小幡・長岡之振者如何ニ候哉与御尋ニ付、其儀相尋候得ば両村ニ而相答候ハ、人馬繼立之義者何分相心得候處、書付之儀者役所伺之上ニ無之候得者、難指出由ニ而、戻リニ書付取候筈ニ御座候由申上候、左候得者此方も右之趣ニ答、可然由被仰付候間、右之振ニ相答候所右之仁被申候者、小幡・長岡之義者御役所へも三四里間も有之候得ば格別之義、御膝元之義ニ候間、是悲ニ明朝迄ニ書付與候様ニと被申候間、又々右之段左市様へ相伺候所、夜中ニ至リ書付遣候様ニと被仰付候間、別紙之通認遣申候一來月下旬御通行之節、人馬繼立之義、被仰聞致承知候、何分無滯繼立可申候、以上

戊七月十三日

水戸下町問屋
林 平八郎印
加藤三郎兵衛

三九
○^朱一他所向キ御用有之、御飛脚等参り候節、以来者一宿式百文宛ニ而旅籠代被下候趣、被仰付候、則宿屋方承届ヶ候所奉承知候ニ付、右御請申上候事

戊六月十日

四〇
○^朱一安永七年戊七月廿四日、豊嶋源兵衛様、御町奉行被仰付、定府之所、御下り被成候ニ付、御祝義ニ罷出候事

四一
○^朱一本五町目加藤三郎兵衛退役被仰付候事

四二
○^朱一同年閏七月十日日本五町目石田庄兵衛問屋役被仰付候事

四三
○^朱一問屋場馬札改候所、不足致候ニ付、仕足シ都合致候、尤前々ハ本馬百枚、輕尻五拾枚ニ候所、此度改双方百枚宛ニ致置候事

四四
○^朱一安永七年戊閏七月廿日津輕様御先荷物先触参り候、人足五拾四人馬七疋、委細場帳ニ有、右取計候内屋時分又々翌日通り御先触参り候、人足五拾四人馬拾七疋、召場帳江扣候、右之通ニ候ニ付、御役所様へ相願、廿一日通り五拾四人者不

残上町人足出候筈ニ被仰付候、廿日通り五拾四人ハ下町へ指出、右無出入候事

一同廿一日通之内馬拾足上町江借度由相願候所、差合候由ニ而不参之由被仰付候

一廿四日津輕様御通行之節、鄉村へ寄馬百八拾三疋願出候ニ付、御郡方江被仰遣候所、廿疋減シ候様申来り候ニ付、彼是と御役所様ニ而御取合御座候所、不承知ニ付、廿疋減シ百六拾三疋相済候、尤不足之節ハ追返シ相遣候筈ニ被仰合候由、御月番吉川甚兵衛様へ御達御座候事

一閏七月廿四日津輕越前守様御通行ニ付、寄人足百八拾式人、去ル十四日願出候通

わけ百拾式人

上御町

但シ上下御町半割ニ而九十人可出所、去ル四月
中仙台屋様御旅行之節、四拾式人上町へかし、此
内廿人去ル五月中本田彈正様御通行之節取返シ、
残り廿人此度取返分入而百拾式人都合ニ成候事、
七拾人下御町出人、但シ九拾人可指出所、前書
訳書之通廿人上町へ取返候分引、右之通ニ相成
候事

右之通ニ而上町人足出入是迄無之候事

一寄馬百九拾三疋

訳三拾式疋

下御町有馬

百六拾三疋

鄉村寄馬

右鄉村寄馬願出者百八拾三疋之所、百六拾三疋相済候ニ付、御

役所様ニ而御郡方江色々御懸ケ合被下候所、右之通より外相済不申候、依而追返シ馬相遣候義御懸ケ合被下候所、其義ハ相済候ニ付、前々書留候通御達シ被仰付候事

以来者余慶之義、不相願追返馬願候方手操宜在之候間、右之心得ニ而取計可申候事

一人馬賃錢銘々払ニ付、賃錢受取并ニ駄賃帳相記候ニ付、手伝人左之通相頼候、尤御役所様へハ不申上候、我々方ニ而相對ニ相頼候事

人馬元帳

裏三町目金兵衛
七軒町茂兵衛

駄賃帳扣

本式町め甚蔵
本五町め伝兵衛

賃錢受取人

本式町め治郎衛門

并ニ人足馬札

本三町め平治郎

渡し兼帶

外ニ本四町め権十

姫人馬札渡人

本三町目

并ニ惣世話

三郎衛門

步行夫役

伝衛門

忠二平ハ御役所番

弥衛門

罷出不申候

忠衛門

馬さし

長左衛門
宇兵衛

一人足遣イ順、下町先順ニ相遣候事

一御組衆人馬指引

石井兵治衛門殿
山田嘉藤治殿

御行列付

立花市郎兵衛殿

加納小衛門殿

中田富衛門殿

御先番

高橋清蔵殿

沼田七蔵殿

一月番同役石田庄兵衛ニ候所、役付無間未問屋場無之候ニ付、
三町目三郎衛門方相頼相勤候事

一津輕様々我々方江給もの更ニ無之候事

一右通行首尾克相濟、御荷物無滞相払候段、同役ヲ以御月番吉
川甚兵衛様江申上候事

但シ給物更ニ無之段も申上候事

人馬遣イ高書上左之通り

覚

一寄人足 百八拾貳人

内 百拾貳人 上御町
七十人 下御町

わけ

百四人

御先触人足

貳拾八人

同断駕籠七挺

四人

御先見

貳拾人

荷付手伝

八人

分払駕籠人足

ノ百六拾四人

指引拾八人残り

上御町

一寄馬百九拾五疋

内 三拾貳疋 下御町
百六十三疋 鄉村

わけ

百六拾三疋

御先触馬

貳拾壹疋

分払

拾七疋

姫馬

貳疋

御評定御荷物

壹疋

山御寺所化衆夏海へ

三疋

買荷物小鶴へ

ノ貳百七疋

指引拾貳疋不足 是ハ追返シ相仕イ申候

右者津輕越中守様御下り御通行人馬遣イ高書上申候、以上

戊閏

七月

石田庄兵衛

林 平八

御町御役所様

一魚蠟燭貳拾五挺

但シ廿目かけ

右者廿三日夜中ぼんぼり式ッ燈申候

右之通横折紙へ相認指上申候事

一巳午ノ年々是迄蠟燭代書上受取不申候所、先同役加藤三郎兵

衛方右仕分急キ出来不申候ニ付、其段御役所様へ申上候而、

右之分ハ追而仕分書上候筈ニ而、先此度分ハ是迄ニ無構相受

取候趣ニ同役方江申談候、即請取書左之通り認指出候

西之内立紙江

一魚蠟燭貳拾五挺

但シ式十匁かけ

右之通槌ニ請取相済申候、以上

三升屋五郎兵衛仕切印

右者津輕越中守様御通りニ付、廿三日夜寄馬参り候ニ付、問屋前江ぼんぼり式ッ燈申候、蠟燭代鑑請取相払申候、以上

安永七年戊閏七月

石田庄兵衛印

岩田太郎衛門殿

右之通認御役所様へ指出候事

四五

○^朱

一安永七年戊閏七月廿六日、本老町目名主五衛門罷越申聞候ハ、年寄衆々尋在之候者、是迄問屋方御取扱御用有之候節ハ、名主元又者組頭方江相呼候哉之旨尋ニ付、五衛門答候ハ、式町目組頭清吉方江申達、清吉方々平八方江申通候義ニ而、我々方江相呼候事ハ無之候段相答候、勿論平八自分願等ニ付候而罷越、願之趣頼候事茂有之候得共、名主組頭方々呼寄候義ハ無之由答罷歸り候由、物語りニ御座候事

右五衛門口上之趣相扣置候事

右之序而申聞候ハ、他所参詣願之義、年寄問屋町頭名主此義者願書ニ無之、其時々口上ニ而願出候趣ニ相済候由、申聞ニ御座候、以来為心得ト口上之趣扣置候事

但、名主老人之事覚違在之候哉も不相知候

依而年寄衆方得ト承置可申事

四六

○^朱

一同戊八月二日、吉川甚兵衛様々御達御座候ハ、御郡方御支配下之者入獄ニ而御追放ニ相成候節、其村々人足呼可申筈ニ候所、左様致候而者、指懸り候御用弁不申候ニ付、御町人足雇之義御町方江御頼被成度由被仰合御座候ニ付、御役所様御承知被成、右人足雇指出之義問屋方へ被仰付、即裏町人足指出シ、賃錢老人百文宛御郡方々相渡り指出来り候所、右之賃錢ニ而者出入無之、人足当り候方ニ而迷惑之趣相聞候ニ付、其段御役所様江申上置候所、此度御郡方江御相談御座候而、賃錢左之通ニ相極り候由、被仰付候

正月十一月迄ハ老人式百文宛

十二月一ヶ月ハ老人三百文宛

右之通賃錢ニ御座候間、御郡方々被仰遣次第人足指出し可申旨被仰付候事

一九月十二日太田御郡方々御追放者在之候ニ付、棒つき人足四人申来り候、尤名当テハ御町名主と有之候所、先月中御達シ御座候ニ付、則四人指出候事

但シ、先月中右人足指出候被仰付在之候節、同役兩人相談致候ハ、棒つき人足ニハ候得共、悪人足ニ順シ心得候ニ付、我々方々申付候而者、不帰伏ニ可有之と了簡致候間、右之趣御役所様へ申上候而、名主持前之大廻り人足々指出シ可然ふり合ニ申出候、然ル所御役所

様御了簡ニハ、正月ノ十一月迄ハ貳百文、十二月ハ三百文と御郡方御相談相聞候事ニ候得者、大廻り人足ノ出シ候而者役に当テ出候牀ニ成、当り候方ノも賃錢請取、其上ニ御郡方ノ渡り錢も受取候と相見ヘ候所、左候而ハ少々たり共御町内不益ニ相成候間、やはり我々方持前ニ致シ、御郡方ノ相渡候賃錢計ニテ、相濟候様ニ取計候様ニ御達御座候ニ付、右請負人相立置、御郡方ノ申来り次第、右請負人江申付指出候筈ニ相決、左之通り請負人相立候

歩行夫役忠右衛門

裏三町目 千蔵

右兩人江申付置候事

右之次第ニ候所、御郡方ノ十二月申来候ニ付、十三日四人指出賃錢貳百文割ニ而八百文申遣候所、御郡方御申聞ニハ、前々ハ百文位宛遣来り候所、其後百五拾文ツ、遣候筈ニ御相談極居候ニ付、貳百文割ニ而者難遣候よし申来候ニ付、又々歩行夫役遣候而申遣候ハ、八月二日御町方御役所様ノ御達御座候ハ、正月ノ十一月迄貳百文割、十二月ハ三百文割ニ而指出候様御達ニ御座候而指出候人足ニ候間、貳百文割ニ御渡被下候様申遣候所、御郡方御挨拶ニ者、御町方ノ右之御かけ合御座候義ハ無之候、其上先達而新町支配ノ指出候人足も百五拾文割ニ相渡候所、無意味相受取申候、御町方御一統之義如何致相違ニ候哉、難心得趣ニ被仰遣候、仍而右之趣同役方月番ニ付、御役所様ヘ申上候得者、右之趣御郡方江御かけ合之上被

仰付候義ニ候よし、御留等御改御座候上ニ而御達御座候筈ニ御座候、然ル所請負人千蔵方ニ而及迷惑ニ候由申聞候間、同役方ニ而取扱、先八百文千蔵方江相渡候事

一九月十六日御月番坏左市様ノ御達、御郡方棒突人足江賃錢之義御留御糺被成候所、先頃御達シ御座候趣ニ相違御座候由、則左之通御書付御渡被成候事

覚

一棒持人足ノ壹人ニ付百四拾八文

是ハ正月ノ同十一月迄指出候分

一同人足ノ壹人ニ付三百文

是ハ十二月ノ壹ヶ月指出候分

右者御郡方御追放囚人、遠郷之者ハ其居村ノ棒持人足指出兼候節、右役所ノ上下御町江頼来り候得者、右直段にて為指出候筈ニ此度太田御郡方ノ相談之上、四郡一同ニ相極候間、以来者其心得を以可指出候事

安永五年申十二月

右之趣申十二月廿三日年寄方江御達御座候由之所、其砌風町兩御役所様共ニ暫ク御引被成候節故、西町御役所様ノ之御達故、我々方江ハ御達シ無御座候所、此度太田御郡方江棒持人足指出賃錢受取候義ニ付、先頃御達之振と違同御座候ニ付、窺出候所、右之趣被仰付候事

一去ル十三日ニ指出候棒持人足四人賃錢之義、右之次第故太田御郡方ノハ六百文受取申候、然ル所千蔵方江ハ先達而貳百文

之割ニ而申聞為請負候事故、式百文不足之所ハ我々兩人ニ而
弁候筈ニ同役江申合候事

四七

○^朱一右御序ニ御物語御座候ハ、大通り之節上町馬不相遣候筈
ニ御座候所、又々御相談御座候上ニ而、前ふり之通り相遣イ
候筈ニ相成候由、以来者右之積りを以取計可申事

四八

○^朱一先頃同役方ハ願出候問屋之義、弥願之通三町め三郎衛門
方相頼候趣ニ被仰付候、尤続キ所一ヶ所と申候而者御故障も
御座候所、申出候意味尤ニ被思召候ニ付、御見済を以当年ハ
三ヶ年三郎衛門方相頼、其後者両所ニ而次キ所相立候様ニ被
仰付候事

右之趣被仰付候ニ付、鼠町御役所様御両所様へ右御礼申上候事

但シ申出之節兩人願之振ニ申出候ニ付、兩人御礼申

上候事

右之義、三町目支配名主鈴木太兵衛方江同役方申談候事

四九

安永八亥年

○^朱一裏町步行夫根出名主組頭元取扱、近年相緩重々步行夫役

共心得を以取扱候故、不応之義も有之、日々問屋前入用人足
式・三拾人ニも及候節ハ甚指支、問屋前無調法茂出来、至極
迷惑ニおよび候ニ付、御役所様へも御内意申上候而、裏町名
主之内先役ニ付塩町名主吉左衛門殿へ右之次第及相談候所、
兎角名主元ニ而取扱候而者行届兼候間、世話之義我々方江相
頼度由ニ御座候、然レ共名主持前之儀、我々取扱候而者懷江
立入候気味御座候而致兼候義も有之候間、一応御同役中江御
内談之上、弥御頼ニ相成候ハ、我々方ニも得卜了簡之上、内々
御役所様へ御聴ニ入候上ニ而否挨拶可致旨申談候、其後塩町
名主方罷越申聞候ハ、先達而御内談之義同役中江相談致候所、
弥々御頼申度候間、同役方江も相談致呉候様頼御座候、仍而
同役相談之上取扱仕方致工夫、則御役所様へ相窺候所、被頼
遣可然由被仰候ニ付、塩町名主方江申遣候ハ御頼之趣弥可承
候、就夫ニ候而者、工夫茂在之候間、出入渡之義步行夫役者
勿論其外へも此方ハ沙汰無之候内ハ渡シ不申候様御達ニ致度
段申遣候得者、致承知候由裏町中渡之義為扣申候事

但、右発端ハ、去九月中ハ之義ニ御座候所、我々ど

も他出其外ニ而相延、去極月ニ至り取極致候事

一右一件ニ付、塩町名主方江三郎衛門を以申遣候ハ、人足指出
候場所元を得卜心得不申候而者取計致兼候間、間口帳を元ニ
致、是迄步行夫御用步当テ順ニ其者姓名小間口共ニ書付遣候
様ニ申遣候、尤紺屋町ハ裏七町目迄無残書付遣候様申遣候、
承知ニ而追々右之書付共支配切ニ遣候間、取調裏町人足出元
帳与致候帳面一冊出来候、以来右之帳面元帳ニ致、年々取扱

候帳面者其年切ニ用イ候様ニ別帳ニ可致候事

一 步行夫役江出人役渡之義ハ前々御法度ニ被仰付候所、近年相緩、内々ニ而請取渡致候、此度改候ニ付急度指扣可申候所、左様ニ而者步行夫役共迷惑致候ニ付、我々方ニ而見濟ニ而步行夫役老人ニ而五人宛為請取候積リニ致候、則御役所様へも右之段御内意申上候而、御聞濟御座候事

附、右老人ニ而五人前ツ、我々共見濟候而為請取候段申

達候處、三郎衛門を以相願候ハ、何卒本町も右之割

ニ仕度趣ニ相願候、仍而者御役所様へも相窺候所、

見濟可遣候様被仰候ニ付、願之通申付候、左候得者

本町裏町ニ而都合一人ニ而十人宛受取ニ成候事

一 塩町名主江申遣候ハ、人足渡ニ致度望之者并ニ受取度者共双方書付ニ致遣候様申遣候ニ付、支配切相糺、追々申来り候、則調候 元帳江張紙ニ而受取人相記候、尤人足惣出払或者出払同様ニ入用之節ハ、受取人も難義致候ニ付、一ト支配ニ而式・三人宛間配リ為受取候步行夫役同様取扱申候事

一 此度仕方改取扱候ニ付、步行夫役共是迄之通ニハ取身無之候間、了簡之上渡人方々老人前廿四文、受取人方より廿四文ツ、都合五拾文口錢為取候筈ニ裏町名主へも相談致、其段支配下江達ニ致候事

但、御役所様へも申上候所、御聞濟御座候事

一人足老ケ年分渡錢老人前九百文宛、外ニ廿四文、步行夫役江口錢、但十人組之義ハ一ケ年ニ四人之引在之候間、三百文引、六百文ニ為受取候、三間間口之者も四百五拾文之内ニ而三

百文引候得者、百五拾文ニ候所、左様ニ而者余り少ク候間、請取人無之候ニ付、此所ハ式百文宛之割合ニ致候事

右之支配々々江申遣候事

請人左之通

步行夫役四人 与八 幸介 善十

兵四郎 千蔵 清十 七兵衛

新蔵 忠蔵 藤八 拾人

右者一ト組仲摩ニ為申合候事

藤兵衛 龜衛門 清介 佐十

文蔵 与衛門 留蔵 権介

右之通ニ問屋場申遣為受取申候、尤步行夫役同道ニ而為相廻候處、錢有合不申候者、其外ハ追而問屋場申書付遣候而為受取候事

一 裏町步行夫人足取扱振并右帳面共持参仕候而委細ニ申上候事

一 正月廿一日步行夫役四人江此度步行夫人足出人取扱ふり合得

ト申達候事

一同右之義ニ付裏町名主江申合之義共在之候ニ付、是迄右取扱馴候町役人老人遣候様ニ申遣候、尤順々通達致候様ニと七軒町名主鳴利兵衛方江申遣候事

一 正月廿三日裏町步行夫人足出人此度相改候仕方通り取扱初ニ御座候番忠治平

五〇^(朱)

一 去戌四月中仙台様御通行ニ付、駅々益不益之義書上候様被仰付候間、左之通り書上候事

覚

一人足千四百廿八人 内 四百人 上御町出人分引
四百八十人 郷村出人分引

残り五百四拾八人 下御町出人

此雇賃 鏹九拾五貫九百文

但平均耆人ニ付鏹百七拾貳文ツ、積り

内鏹六貫貳百七拾六文

仙台様々賃錢相渡り候分割渡シ耆人ニ付

平均拾耆文ツ、

指引錢

鏹八拾九貫六百貳拾文 雇賃不足

一 馬九百七拾五疋 内 四拾疋 上御町馬引
八百廿三疋 郷村馬引

残り百拾貳疋

右者馬代御金拝借仕罷在候有馬ニ御座候得共、外より

雇馬と見候得者、耆疋ニ付鏹三百文ツ、之積り

此賃錢三拾三貫六百文

内鏹三貫貳百六拾四文

仙台様々駄賃錢相渡り候分割渡シ耆疋ニ付平均

廿八文ツ、

指引残り

鏹三拾貫三百三拾貳文 雇賃不足

人馬雇賃不足

ノ鏹百拾九貫九百五拾貳文

右者当四月中仙台様御通行之節人馬御入用指出候所、被下候賃錢計ニ而者出人無御座候ニ付、前書之通り下御町中々償相勤申候間、一同難義仕候、右之外問屋場式ヶ所并本陣入用大枚金拾両余も相掛り候間、我々共迄難義至極ニ奉存候ニ付、右之段奉申上候、以上

戌十一月

下御町問屋

御町御役所様

石田庄兵衛印

林 平八印

右之通書上申候事、尤旧冬留落シ候間、此所へ写置

五一^(朱)

一 安永八年亥二月十八日、御役金方小原銀藏様御役所江罷越、馬金御貸出相願候所、去暮上納残り金相済不申候而者、

御貸出相成不申候由、被仰聞候得共、当春相済候御金者、別

口新規拝借人ニ候間、御貸出無御座候而者、甚々難義仕候趣、

達而相願候ニ付、御聞届ケニ而貳百両小粒御封印之俣相請取

申候、則御手形并ニ大吟味方御差紙相納申候事

右御金例年寄衆本役江相渡置候ニ付、岩田太郎衛門殿方江持

參致候所、不快ニ而居候間、上田作十殿へ相渡置候様申聞候

間、上田氏江罷越、右之趣申談候所、例本役江請取候義ニ候

間、一応可申遣候間、岩田氏々沙汰有之迄ハ御手前方江預り置候様申聞候ニ付、預り置候事

一右之義ニ付、上田氏被參候所、式百両預り之義、前々問屋衆ニ者無人ニも無之候間、我々方江預り置候所、當時問屋共ニ無人ニも無之、都而無用心ニも無之候間、拝借貸出之節迄預り置候様申聞候、拝借渡之義、明日指合候間、明後廿日ニ可致由申合候事

右之趣御役所様へ一々申上候、御月番吉川甚兵衛様へ申上候

但シ、右之通之留在之候ニ付而者、年寄衆方江預ケ候ニ限り候事ハ無之義と存候間、写シ置申候

五二
○^朱

一七月十一日同役罷越申聞候ハ、額田屋伊兵衛昨夜罷越相願候ハ、裏宅町目抱屋敷へ権三郎と申馬持指置候所、五三日以前々行衛相知不申候、女房承り候所、右之者も行衛不存候左候得者、出走仕候事と相見候所、馬之義ハ御用相勤候事ニ候間、如何取計可然哉と申出候由、右者本宅町目与兵衛方渡馬ニ候ニ付、与兵衛呼候而右之段申達、渡馬権三郎受人尋候所、本五町めかちや兵十二候由、則右兵十方江申達候ハ、権三郎義出走之由ニ候得者、馬之義取仕抹致、御用相勤候様ニ相達候事

五三
○^朱

一七月廿五日御用ニ付、御呼出罷出候所、岩城御領西平久木村文五郎と申あい玉商人、当所本宅町目柳屋吉兵衛方江商売掛有之、度々及催促ニ候所、返済無之候ニ付、岩城御役人中江相願、添輪持參致、去ル十五日ニ川岸清三郎方江滞留致、右御添輪取次呉候様ニ相頼候所、埒明不申候由ニ付、直ニ御町方御役所江右添輪持參仕候所、御聞糺之上、右文五郎宿申付、前ふり之通り宿屋を以我々方江指出、我々御役所様へ指出候様ニ取計可申趣、右文五郎方江茂当所御作法申聞候様ニ被仰付候間、右文五郎同道致、宿ハ四町目権十方江申付、則右御添輪我々御役所様へ指上候状箱上書左之通

安藤対馬守内

水戸

鍋田源五兵衛

町御奉行様

原 弥十郎

右之通ニ御座候

一右文五郎願書、宅町め名主方江廿四日ニ指出候由、名主方より右文五郎方江相返シ、手筋通り指出候様ニ申遣候ニ付、宿屋権十同道ニ而、宅町目名主方江願書指出候事

五四
○^朱

一安永八年亥八月四日、相馬因幡守様御下り先触来ル、写早速御役所様へ指上候事、委細者庭帳ニ有
一寄人馬積り左之通

人足百六拾人 内 八拾人 下町 八拾人 上町

右之内去十月中上町江貸、指引残三拾人

此度指引申度奉存候、左候得ハ

百拾人 上御町

五拾人 下御町

右之通ニ罷成候、申出之通相濟候

馬百五拾疋 内三拾三疋下町馬病馬引残全有馬

引残り百拾九疋 不足

右之通申上候所、上町九疋鄉村百疋都合百四拾疋済ム

右者七日曉六ツ時屹ト問屋前へ着仕候様、奉願上候

右之通白半切江相認、御先触写と一同ニ御評定所へ罷出指上候事

一七日府中御泊り、長岡御休、石神御泊りニ而御町御通行

一林平八病氣ニ付、御雇高野惣次郎罷出候事

御町番 沼田七蔵殿 人馬指引蓮田儀七蔵

山田嘉藤治殿 綿引五左衛門殿

鈴木文蔵殿 行例付 鈴木藤治衛門殿

大山佐左衛門殿

広瀬吉衛門殿

一巳中刻ニも可有歟、問屋場江落合長四郎罷越申聞候者、相馬御役人中、只今書面至来致候所、御小休ニ御会所御借り被成度趣申来り候ニ付、右之段御役所様江申上候处、御頭様へ

も被仰出候上、御挨拶有之筈ニ候、乍去御会所守中江も右之段相咄シ掃除等相心懸ケ、各様へも御咄シ可申段被仰付候、急成義ニ御座候間、掃除人足等御貸被下候様ニと申候ニ付、步行夫五人御会所江遣ス、扱又年寄衆江も長四郎方申出候趣ニ有之間、此方ハ相咄シ不申候事

一御役所様御呼出ニ而被仰付候者、会所御休之義弥右之趣ニ相成候間、万事大津屋御休之振を以取扱可申候、勿論問屋両人ともニ御案内心ニ御会所前江罷出可申候、御出立之節者例之通問屋場江罷出可申趣、被仰付候事

右御会所御休ニ罷成候趣、早速御町番衆へも步行夫役を以為知候事

一九ツ半時、御会所江御入御賄長四郎方申出シ

一御会所江年寄上田氏、加藤氏被出張候、尤問屋両人ともニ相詰居候事

一八ツ時御出立無滞御通行相濟候段、早速御訴申上候事

附、給物例之通百疋宛、此段も申上候事

同日 一女房衆通り馬式拾五疋、人足四拾五人、寄人馬割、左之通り

馬拾疋 上御町

人足四拾五人 内 廿三人 上御町 廿式人 下御町

右申上候通、相濟

此日若殿様も御下り之由、内々ニ而御会所へ御休、此節も長四郎方御賄等指出候由、此方ニ而者何ニも構不申

候

一前後人馬遣高書上左之通り

覚

八月四日
一歩行夫 式拾壹人

わけ 八人持

七人

六人

ノ式拾壹人

内 拾五人 裏町
六人 本町

右者急当テニ指出申候

此分拾人半上御町江貸

同五日
一同三拾八人

わけ式拾四人

拾式人

式人

ノ三拾八人

右者急当テニ指出シ申候

此分拾九人 上御町江貸

同六日
一同 式拾式人

わけ拾四人

八人

御先荷物

長持 壹棹

同 壹棹

同 壹棹

八人持三棹

六人持式棹

両掛挾箱壹荷

内 式十八人 裏町
拾人 本町

御先荷物

七人持式棹

同 壹棹

ノ式拾式人

右者急当テニ指出シ申候

此分拾壹人

上御町江貸

同七日
一寄夫百六拾人

わけ九拾七人

式拾壹人

八人

四人

五人

ノ百三拾五人

残り式拾五人

内 廿三人 上御町
式人 下御町

同日
一寄馬百四拾疋

内 三拾壹疋 下御町
九拾疋 上御町
百疋 郷村

わけ 五拾壹疋 札物本馬 九疋 右姫馬

三拾疋 札物輕尻 廿三疋 分払本馬

拾五疋 自分雇輕尻 三疋 本多様家中下り

式疋 仙台中下り壹疋 公儀御材木方飛脚下り

式疋 買荷物小鶴迄送り

ノ百三拾六疋

残り四疋

同八日
一寄夫四拾五人

わけ五拾人

内 廿三人 上御町
廿式人 下御町
札人足

指引五人不足

急当テニ指出シ申候

此分式人半

上御町江貸

同日
一馬四拾壹疋

内 三拾壹疋 下御町
拾疋 上御町

わけ拾六疋

札物本馬 拾七疋 輕尻

拾疋

後レ荷物

〆四拾三疋

指引式疋不足 是ハ追返シニ仕申候

同日
一歩行夫

式拾九人

後レ荷物

わけ

九人 長持壹棹

拾四人 同七人持式棹

六人 同壹棹

〆式拾九人

内 拾壹人 本町
拾八人 裏町

右者急当テニ指出シ申候

此分拾四人半上御町江貸

前後急当テ

〆百拾五人 下御町分出ス

内五拾七人半 上御町江貸

右者相馬因幡守様当七日御通行并前後御荷物通候ニ付、人馬遣
高書上申候、已上

亥八月

御雇

高野惣治郎

御町御役所様

石田庄兵衛

一魚蠟式拾五挺

但シ式拾匁かけ

右者、六日夜中、七日夜中ぼんぼり式ツ江燈申候

五五

〇(朱)八月廿四日

一歩行夫四拾五人

急当テ

わけ

右者、峯姫様岩船江御引移り被遊候ニ付、御城分栗崎継ニ而御
荷物送り候歩行夫ニ有之処、内物書衆失念被致候由ニ而、曉六
ツ時出刻之処、至極過急ニ申参、尚又御頭様よりも中田富衛門
殿を以、物書衆間違ニ有之間、随分町役人江申合出刻遅々無之
様指出候様被仰付候間、裏町者囚人歩行夫請取人共無残り出候
間、本町江有人ニ而指出候様ニ申遣、漸ク相揃間を合せ申候事
又歩行夫拾五人、追人右過急故本町江割もの

五六

覚

〇(朱)

一馬拾九疋

一人足七拾五人 外々拾五人 夜中計

右者、来ル廿二日水戸発足ニ而、奥女中被登候条、右人馬水戸

千住迄宿々無滞指出シ可申者也

九月廿日

宿々 問屋中

水戸 小泉彦次郎

右先触千住ニ而可相返候、以上

覚

御昼 小幡宝円寺

御泊り府中矢口平左衛門

二日目

御昼 中村本陣川村義左衛門、御泊り牛久本陣宮本庄左衛門

三日目

御昼 取手本陣染野藤左衛門、御泊り小金本陣中野清衛門

四日目

御小休松戸本陣伊藤惣兵衛、御昼 千住本陣秋葉六郎兵衛

外二

一大井六郎左衛門 家来拾七人

一酒井道本 家来拾壹人

一同心 拾貳人

一御中間 廿貳人

一里鋤 三十人

一又者 拾貳人

右者分本陣之外宿心掛ケ置可申候

右者、来廿二日水戸発足ニ而、奥女中四日道中ニ而、被登候ニ

付、昼泊共ニ本陣々江も相達、下宿等も前書之通心掛ケ置可申

候、以上

九月廿日

宿々

問屋中
名主中

水戸 小泉彦次郎

右先触千住ニ而可相返候、以上

一御長持式棹

四人持宛

一馬 五疋

右来廿一日水戸出立、五日道中ニ而罷登候条、人馬心掛置可被申候、以上

九月十九日 水戸御賄方

長岡々千住迄

宿々問屋中

小幡 府中

中村

牛久

我孫子

小金 千住

右宿々江申達候、上通り膳碗四人前、中通りニ而、拾五人前損料物心掛ケ置可被申候、其外都而前振之通り取計可被申候、以上

御奥方御先触老通

御賄方御先触老通

式通

右者御急御先触ニ有之間、昼夜刻付を以、無滞々御継送り可被成候、以上

九月廿日 已上刻

石田庄兵衛

長岡々 千住迄 御問屋中

右者、御姫様御登御先触ニ有之候間、前書之通添触致遣候、以

上

右五町目月番ニ候所、重而見合ニ木村伝六記置申候

九月廿一日申来り候

一歩行夫六拾四人

右者、御姫様御登ニ付、御城迄指出候様ニと、深沢左様申来候ニ付、御中間衆江相答候ハ、御町方々御証文無之候而者申請候義、相成不申候由相答候所、乍去指掛り候事、尚更賃夫ニ相成候事も知不申候間、請置候而も可然由被申候得共、私ニ御請も如何ニ御座候間、御内々御役所へ相伺候所、証文無之候而ハ請不申候様ニと被仰付候間、右之趣ニ相答、書付相返シ申候、併何れニ致候而も申来り候人足ニ有之間、先ツ裏町通ニ而当テ置可申由、是又被仰付候間、上下半割之積リニ、三拾式人申付置候事

一歩行夫 三拾式人

わけ

五七

○一本四町目加藤新六方々人足四人遣候様ニと太賃帳遣候間、

持出之義者御家中様江も御役人様之外ハ指出不申候通りニ御座候而も、御町江者宿屋之外ニハ指出不申候由相答指遣候所、一寸対談致段申越候ニ付、三郎衛門罷越候所、新六被申候ハ御採葉御用ニ付、金主共罷下り逗留致候所、今日太田江罷越候ニ付、先刻歩行夫申遣候得者、難指出段被申越候所、御用

ニ而罷下り候者ニ候得ハ、被指出候而も宜敷筋合等存候、如何之訳ケニ而有之哉承知致度段申候ニ付、三郎衛門相答候者、先刻御答申候者唯一ト通ニ相心得御答申候事ニ御座候、御用と御座候得者格別之義ニ御座候得共、一存ニ而者難御答申候、後刻答可申と相答罷歸り、御月番吉川甚兵衛様へ御伺申上候所、右之歩行夫者全ク持出シ人足ニ候得者、指出候ニハ不及申候、馬之義者御用ニ而罷下り居候ものニ候得者、指出候而茂可然候、尤御家中様方御交代も御用ニ候得共、持出人足ハ指出不申候御定ニ候間、右之段相答、馬計指出候様ニと被仰付之間、右之振新六方江申遣候、以来心得として留置申候

安永九年子二月十九日

五八

○一子ノ三月二日仙台御家中被仰聞候ハ、四月下旬陸奥様御

下国湊御通ニ付、御先勢者御城下通有之候由、人馬繼立之儀被仰聞候、則御役所様江窺之上請書遣シ申候、委細問屋場御用留ニ扣有之候事

一五月朔日仙台様鹿嶋通ニ而御下国ニ付、御先勢此方通り御城下泊リニ相成候ニ付、宿割衆兩人罷越候、四町目やど屋伊兵衛方江滞留ニ有之候、是令御通り相済候迄之一巻別に書留扣有之候事

一五月廿四日右仙台先勢通り人馬遣高賃銭割合等書上相済申候、具ニ者別帳一卷有

一六月十五日吉川甚兵衛様御達シ、仙台先勢通之節、鄉村馬

（裏表紙）

賃錢渡方書付指出候様被仰付候、則別紙一卷扣之通認上申候、
外ニ右之節宿割帳表冊指上候、外ニ年寄衆江一冊三郎衛門を
以遣申候事

佐藤五右衛門

五九

○（朱）一安永九年子七月十日阿久津左市様江御呼出ニ而御達左之
通り

一道中奉行土屋遠江守・安藤彈正少弼殿御達江も被相触候由
ニ而、御城付共江一紙ニ而為見被申候書付写

御用ニ而往来之面々末々之家来雇之もの等、心得違無賃之手
代り人足駕籠等為指出候故、人馬相増又者折々口論等も有之
間、已来旅行之節先触江添へ、宿々江重立候家来之印鑑渡置、
先触之外人馬入用之節ハ馬何疋人足何人と相認、右家来之印
形之書付可相渡間、印鑑引合賃錢請取、縦合^⑤家来之内申付
候共、印鑑無之人馬者指出間鋪旨窺之上、松平右京太夫殿
被仰渡候ニ付、右之趣宿々江申渡候間、為御心得御達申置
候

子六月

右者諸向江御達ニ候間、已来右之趣相心得取扱可申候、尤右書
付問屋場張置候而も可然由被仰付候事